

財団法人みずほ教育福祉財団
特別支援教育研究助成事業
特別支援教育研究論文
— 平成 21 年度 —

多様なニーズに応じた特別支援学級の弾力的な学級経営に関する実際的研究
— 通常の学級との連携を図った魅力ある授業づくりを通して —

沖縄特別支援授業研究会

山川 米子（西原町立西原東中学校：代表）

平成 22 年 3 月

研究協力：国立特別支援教育総合研究所

目 次

要 旨	1
はじめに	1
I 研究の目的と方法	3
II 子どもが生き生きと活動できる学級づくり－教育課程を大切にする 時間割作成の工夫と関係者との連携をとおして	3
III 児童の障害特性に応じた効果的な教科学習の在り方－自閉症・ 情緒障害特別支援学級における教育課程の編成や具体的な支援の工夫－	10
IV 豊かなつながりを作る「交流及び共同学習」の在り方－障害のある児童の 特性に応じた教育課程の編成と具体的な支援の工夫－	14
V 自立活動の観点を基にした個別の指導計画の活用と授業の工夫	17
VI 通常の学級の生徒への障害理解を図るために－道徳の授業をとおして－	26
VII 研究のまとめと今後の課題	30
おわりに	31
引用参考文献	31
資 料	

多様なニーズに応じた特別支援学級の弾力的な学級経営に関する実際的研究

ー通常の学級との連携を図った魅力ある授業づくりを通してー

沖縄特別支援授業研究会 山川 米子（西原町立西原東中学校）：研究代表
崎濱 朋子（沖縄市立中の町小学校）
上門 香（読谷村立古堅小学校）
喜友名 朝美（うるま市立与那城小学校）
金城かなえ（西原町立西原中学校）
新城 理奈（那覇市立小禄南小学校）

要旨：本研究では、平成21年3月に告示された特別支援学校学習指導要領をふまえて、特別支援学級における教育課程の編成の具体化を図り、子どもが生き生きと活動できる魅力ある学級作りや授業づくりをめざし、多様なニーズに応じた弾力的な学級経営の在り方を検討することを目的に実践を重ね検証を行ってきた。

実際的な取り組みとして、通常の学級に在籍する発達障害等の児童生徒への支援や通常の学級との交流及び共同学習の在り方についての実践。特別支援学級における自立活動の在り方についての実践。教育課程の編成の留意点と交流及び共同学習を考慮した時間割の作成についての検討。通常の学級の児童生徒への障害理解の啓発について具体的な取り組みなどを進めてきた。

本研究をとおして、多様なニーズに応じた特別支援学級の弾力的な学級経営に関する実際的な知見を得ることができた。

キーワード： 特別支援学級、教育課程、交流及び共同学習、教科学習、障害理解

はじめに

多様なニーズを抱え、その状態像も多岐にわたる子どもたちが在籍する特別支援学級において、子どもたちが生き生きと生活できる学級をどのように作っていくかは担当者にとって大きな責務である。特別支援学級は、通常の学級における指導では十分に指導の効果を上げることが困難な児童のために編成された少人数の学級であり、児童の障害の状態等に応じて、適切な配慮の下に指導が行われる必要がある。

教育課程の編成においても、特別的教育課程を編成することが認められ、学級の実態や児童の障害の程度等を考慮の上、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領を参考とし、実情にあった教育課程を編成することも認められている。

しかし、特別支援学級は、個々の児童の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行い、教師間の連携に努めながら、効果的な指導を行い、併せて、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習を計画的、組織的に行うことが求められている。

本研究では、特別支援学級が魅力ある学級経営を図っていくための具体的な方策を検討することを念頭に、以下の5つの課題を挙げた。

①子どもが生き生きと活動できる学級作りのために教育課程を大切にする時間割作成の工夫と校内関係者との連携をどのように図れば良いのか。

実態に基づいた教育課程の編成を具体的な形にしていくための一つの押さえどころとしての「時間割作成」と「校内関係職員との連携」に焦点を絞っている。これまでの時間割作成が、通常の学級が決まってから後付で特別支援学級の時間割を作成していたことで、子どものニーズに応じた生活単元学習や自立活動等の時間の確保が難しいという状況を経験していたことに起因する。この課題解決のためにどのように教育課程を編制し、時間割を作成すればよいのかを明らかにし、校内関係職員とその解決に向けた取り組みと体制作りを進めることが求められている。

②児童の障害特性に応じた効果的な教科学習をどのように図り、特別支援学級における教育課程の編成や具体的な支援をどのように工夫すれば良いのか。

知的障害特別支援学級の児童に対する効果的な教科教育を展開する上で、知的障害の特徴及び学習上の特性を踏まえ、児童が自立し社会参加するために必要な知識や技能、態度などを身につける学習の保障が求められている。

特別支援学校学習指導要領の各教科等を参照しながら、児童生徒のニーズに応じた教科学習をどのように展開すれば良いのか具体的な方策が求められている。

③豊かなつながりを作るための「交流及び共同学習」はどのように展開すれば良いのか。

「交流及び共同学習」の展開においては、障害のある子どもと障害のない子どもが理解し合うための絶好の機会であり、同じ社会に生きる人間として互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学ぶ場であると指導要領にも明記され、学校の教育活動全体を通じて、計画的、組織的に行うことが求め

られている。子ども同士の豊かなつながりを築いていくためにも、通常の学級との連携や教育課程上の位置づけ等についてどのように計画的、組織的に進めていくことが望ましいのか課題が残されている。

④特別支援学級の中には、異年齢集団で個々の能力差が大きいため教育課程をどのように編成し、どのように個別の指導の時間を確保すれば良いのか難しい状況があげられる。

自立活動の指導をどのようにして教育課程上に位置づけ、内容を具体化し、個別の指導計画を基に児童の教育的ニーズをどのように反映させ、個々の目標を具体的にし、どのように組み合わせて効果的に展開していくのか

⑤通常の学級の生徒への障害理解を図るための具体的な指導はないのか。

特別支援学級に在籍する児童生徒がよりよい学校生活や学習生活を過ごすためにも、周りの友だちや職員の特別支援学級に在籍する児童生徒に対する適切な理解が大切になってくる。障害の特性の理解に留まらず、具体的な対応の理解と実践に広げていくことが求められてくる。では、このような取り組みを教育活動のどの場面でどのようにして展開を図っていけば良いのか試行錯誤が繰り返されている。

本研究では、これらの**5つの**課題を解決するために、それぞれの課題解決のための仮説を立て、具体的な指導実践をとおして検証を図ることにした。

本研究の検証をとおして、今後、特別支援学級に在籍する児童生徒が生き生きと学校生活を営むことができるための魅力ある学級づくりをめざす上での一助になればと考えている。

I 研究の目的と方法

更なる特別支援教育の充実発展のため、学校内のリソースとしての特別支援学級の役割を明確にし、通常の学級との連携を図りながら多様なニーズを持った児童生徒への学習指導・生活指導に対応する特別支援学級の弾力的な学級経営が求められている。

また、特別支援学校学習指導要領の改訂を受けて、児童生徒の実態に応じた魅力ある特別支援学級の教育課程を再編成し、児童生徒の生きる力につながる授業づくりを構築していくことも求められている。

そこで、本研究では、平成21年3月に告示された特別支援学校学習指導要領をふまえた特別支援学級の教育課程の再編成を具体化し、魅力ある授業づくりを通して、通常の学級に在籍する発達障害等の児童生徒への支援も含めた特別支援学級の経営構築を目的としている。

II 子どもが生き生きと活動できる学級づくり—教育課程を大切に作る時間割作成の工夫と関係者との連携をととして—

1 問題の所在

8名の児童が在籍する本校の知的障害特別支援学級（以下、「本学級」という。）は、学級の実態や児童の障害の程度等を考慮の上、特別支援学校学習指導要領を参考にし、領域・教科をあわせた指導や自立活動を取り入れ、下学年の教科の目標や内容での対応や知的障害者である児童に対する教育を行う特別支援学校の各教科で対応するなど、実情に合った教育課程を編成してきた。

また、小学校学習指導要領の総則をふまえて、障害のある児童などについては、個々の児童の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行い、特別支援学級については、教師間の連携に努め、効

果的な指導を展開し、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設けるなどの取り組みも進めてきている。

しかし、子ども達が自らの課題を意識して生き生きと活動できることや、通常の学級の児童らと楽しく活動を図っていく上で、毎年、教育課程の編成や「時間割の編成」、「交流及び共同学習」の難しさを感じてきた。時間割の編成については、通常の学級の時間割が決まった後に特別支援学級の時間割を編成していたことから、児童の実態に応じた生活単元学習や自立活動に制限がかかってしまった経緯がある。また、通常の学級等との交流及び共同学習についても、日々の様々な場面でのような活動を取り入れ、校内外の協力体制を構築し、効果的な活動を進めていけるのか課題として残されている。

2 ねらい

- (1) 児童の実態に基づいた教育課程の編成と併せて学級経営の基本方針に基づく「時間割の編成」の留意点を明らかにする。
- (2) 通常の学級との具体的な「交流及び共同学習」の実践をととして、「交流及び共同学習」の円滑な活動展開を図るための留意点について明らかにする。

3 研究の仮説

- (1) 子どもの実態に照らし合わせて編成した教育課程を時間割の中に反映させていくために、特別支援学級の時間割編成を先行させ、積極的に通常の学級担当者と協議を重ねていく手続きを図り、留意点を整理して実行することで、支援学級のより良い学級経営や子どもがいきいきと生活できる学級作りを図ることはできるのではないか。
- (2) 通常の学級在籍児童への障害理解を促すための教育活動や通常の学級担任との円滑な情報の共有を図ることで、より良い交流及び共同学習を展開することができるので

はないか。

4 研究の内容と方法

- (1) 時間割編成の手順の検証と留意点の整理
- (2) 交流及び共同学習の実施に向けた留意点の整理と実践検証

5 学級経営の実践（検証）

- (1) 時間割の編成手順についての検証

① 学校長・教頭・教務主任との連携

特別支援教育の充実を推進するにあたり、学年度末に特別支援教育連携会議を行った。特別支援学級の教育課程の編成や学校経営、学級経営の課題や指導の重点事項を協議し、助言を受けた。会議では、学級や学年の枠を超えて教師同士が連携協力することがますます必要とすることが確認された。また、在籍人数が多いことをふまえ、各学年部への支援体制(担外職員割り当て)作りを図った。

② 新年度特別支援学級経営説明及び協力依頼

年度当初、職員会議において「学級の経営方針」や子どもたちの実態・健康状態、教育課題・指導の方針などを個別の指導計画や引き継ぎ資料等をもとに丁寧に伝えた。その中で本学級の子どもたちは、全職員の理解と協力のもとで育つことを伝え、支援体制の協力を依頼した。

③ 時間割の編成について

本学級は、児童が全学年にまたがり、実態やニーズが異なるため、日課や学級作りに悩むことが多い。一人一人が生き生きと学校生活を送るためにも時間割の編成は大きな影響を及ぼす。一人一人に応じた指導の充実を図るためには、ニーズに応じた教育課程の編成や個別の指導計画の編成が重要な課題となってくる。そこで、時間割の編成については、早め(3月末)に教務主任や専科担当等との

時間 割編成会議に参加させてもらい、協力依頼(表1)を進めた。

表1 時間割編成に関する協力依頼

特別支援学級時間割作成に関する協力依頼																								
〇〇〇学級担任 〇〇〇																								
本学級は、在籍児童数7名で全学年にまたがり、実態やニーズが異なるため、教育課程の編成や時間割作成、学級づくり、協力学級との連携で多くの課題を残しています。本学級の児童一人一人が多くの仲間とふれ合い、生き生きと学校生活を送るためにも実態に応じた時間割の編成(日課表)、交流及び共同学習等での教師間の連携がとても大切です。そこで、先生方の更なるご理解と協力をよろしくお願い致します。 ☆時間割編成について☆ 特別支援学級の時間割編成についての留意点を確認した上で、これまでの時間割編成の流れを改善し、本学級及び児童の実態に応じた時間割の編成ができるよう、以下の点を提案します。 1 〇〇〇学級時間割作成の留意点 <table><thead><tr><th>週時程表(日課表)作成の留意点</th></tr></thead><tbody><tr><td>○児童の自然な生活のリズムや活動の流れを大切にします。</td></tr><tr><td>○1週間、一日の流れがわかりやすいようにする。(朝の活動、朝の会、なかよしタイム等)</td></tr><tr><td>○日常生活の指導、生活単元学習の時間は、可能な限り全員が揃う時間を確保する。</td></tr><tr><td>○領域・教科を合わせた指導や総合的な学習の時間については、数時間まとめたり、単元、行事等において一定期間毎日続けるなど指導効果を高めるため弾力的に運用する。</td></tr></tbody></table> 2 時間割編成における「これまでの流れ」と「今後の留意点及び改善点」 <table><thead><tr><th>これまでの流れ及び問題点●</th><th>留意点及び☆改善点(案)</th></tr></thead><tbody><tr><td>① 教務主任より全学級時間割の提案(新学期職員会議)…3月末に初任者研修時間割・校内初任者指導教諭時間割、専科(音楽・理科、その他の教科の担当者)を含めた時間割編成会議の実施。</td><td>☆新年度時間割編成会議に特別支援学級担当者も参加する。</td></tr><tr><td>② 算数科、体育科(運動場・サブ・体育館の使用時間割)、英語活動(ALT)等時間割の提案</td><td>・初任者や指導教諭等の研修時間については、校外研修との関連もあるので最優先する。(音楽・理科専科、一部の教科)</td></tr><tr><td>③ ①②に基づき各学級担任が学級時間割の編成を進める。(学期毎に多少の変動あり)</td><td>・算数科(指導法改善担当者)は、少人数グループ学習のため学年合同の時間(3学年以上)を設定し、専科等との関連で優先する。</td></tr><tr><td>④ コンピュータ教室、図書管理用時間割の希望時間調査</td><td>・外国語活動は、ALTの勤務日が設定されている。</td></tr><tr><td>⑤ 特別支援学級担当者が各学級の時間割を基に学級時間割と個別の指導時数を照らし合わせて一人一人の時間割を作成する。</td><td>☆体育時間割は、低・中・高の組み合わせで設定するので、本学級対象児童の学級を優先して組み合わせる。(交流及び共同学習の時間を一致させる。)→教科学習での人数を軽減できる。</td></tr><tr><td>⑥ 協力学級担当と時間割の確認や再調整を進める。</td><td>☆通常学級での国語、算数等の時間割をできる限り連続にしてみてもいい、本学級でまとまりのある時間を確保する。</td></tr><tr><td>●①～⑥の流れを経て、合同の時間で行う領域・教科を合わせた指導(日常生活の指導や生活単元学習)、自立活動等の設定を行うため効果的な時間割の作成が難しい。</td><td>☆本学級では高学年児童の時間割(専科等)を優先して編成し、低学年児童については、必要に応じて交流学級担当者へ再調整して編成を進める。</td></tr><tr><td>●国語・算数等個別指導が中心の教科学習については、交流及び共同学習の時間が合わないため、教科やグループ編成の組み合わせがうまくいかず、指導内容や授業づくりが進みにくい。</td><td>☆対象児童のいる協力学級の体育や専科(音楽・理科)等、交流及び共同学習の時間をできる限り併せる。</td></tr></tbody></table>		週時程表(日課表)作成の留意点	○児童の自然な生活のリズムや活動の流れを大切にします。	○1週間、一日の流れがわかりやすいようにする。(朝の活動、朝の会、なかよしタイム等)	○日常生活の指導、生活単元学習の時間は、可能な限り全員が揃う時間を確保する。	○領域・教科を合わせた指導や総合的な学習の時間については、数時間まとめたり、単元、行事等において一定期間毎日続けるなど指導効果を高めるため弾力的に運用する。	これまでの流れ及び問題点●	留意点及び☆改善点(案)	① 教務主任より全学級時間割の提案(新学期職員会議)…3月末に初任者研修時間割・校内初任者指導教諭時間割、専科(音楽・理科、その他の教科の担当者)を含めた時間割編成会議の実施。	☆新年度時間割編成会議に特別支援学級担当者も参加する。	② 算数科、体育科(運動場・サブ・体育館の使用時間割)、英語活動(ALT)等時間割の提案	・初任者や指導教諭等の研修時間については、校外研修との関連もあるので最優先する。(音楽・理科専科、一部の教科)	③ ①②に基づき各学級担任が学級時間割の編成を進める。(学期毎に多少の変動あり)	・算数科(指導法改善担当者)は、少人数グループ学習のため学年合同の時間(3学年以上)を設定し、専科等との関連で優先する。	④ コンピュータ教室、図書管理用時間割の希望時間調査	・外国語活動は、ALTの勤務日が設定されている。	⑤ 特別支援学級担当者が各学級の時間割を基に学級時間割と個別の指導時数を照らし合わせて一人一人の時間割を作成する。	☆体育時間割は、低・中・高の組み合わせで設定するので、本学級対象児童の学級を優先して組み合わせる。(交流及び共同学習の時間を一致させる。)→教科学習での人数を軽減できる。	⑥ 協力学級担当と時間割の確認や再調整を進める。	☆通常学級での国語、算数等の時間割をできる限り連続にしてみてもいい、本学級でまとまりのある時間を確保する。	●①～⑥の流れを経て、合同の時間で行う領域・教科を合わせた指導(日常生活の指導や生活単元学習)、自立活動等の設定を行うため効果的な時間割の作成が難しい。	☆本学級では高学年児童の時間割(専科等)を優先して編成し、低学年児童については、必要に応じて交流学級担当者へ再調整して編成を進める。	●国語・算数等個別指導が中心の教科学習については、交流及び共同学習の時間が合わないため、教科やグループ編成の組み合わせがうまくいかず、指導内容や授業づくりが進みにくい。	☆対象児童のいる協力学級の体育や専科(音楽・理科)等、交流及び共同学習の時間をできる限り併せる。
週時程表(日課表)作成の留意点																								
○児童の自然な生活のリズムや活動の流れを大切にします。																								
○1週間、一日の流れがわかりやすいようにする。(朝の活動、朝の会、なかよしタイム等)																								
○日常生活の指導、生活単元学習の時間は、可能な限り全員が揃う時間を確保する。																								
○領域・教科を合わせた指導や総合的な学習の時間については、数時間まとめたり、単元、行事等において一定期間毎日続けるなど指導効果を高めるため弾力的に運用する。																								
これまでの流れ及び問題点●	留意点及び☆改善点(案)																							
① 教務主任より全学級時間割の提案(新学期職員会議)…3月末に初任者研修時間割・校内初任者指導教諭時間割、専科(音楽・理科、その他の教科の担当者)を含めた時間割編成会議の実施。	☆新年度時間割編成会議に特別支援学級担当者も参加する。																							
② 算数科、体育科(運動場・サブ・体育館の使用時間割)、英語活動(ALT)等時間割の提案	・初任者や指導教諭等の研修時間については、校外研修との関連もあるので最優先する。(音楽・理科専科、一部の教科)																							
③ ①②に基づき各学級担任が学級時間割の編成を進める。(学期毎に多少の変動あり)	・算数科(指導法改善担当者)は、少人数グループ学習のため学年合同の時間(3学年以上)を設定し、専科等との関連で優先する。																							
④ コンピュータ教室、図書管理用時間割の希望時間調査	・外国語活動は、ALTの勤務日が設定されている。																							
⑤ 特別支援学級担当者が各学級の時間割を基に学級時間割と個別の指導時数を照らし合わせて一人一人の時間割を作成する。	☆体育時間割は、低・中・高の組み合わせで設定するので、本学級対象児童の学級を優先して組み合わせる。(交流及び共同学習の時間を一致させる。)→教科学習での人数を軽減できる。																							
⑥ 協力学級担当と時間割の確認や再調整を進める。	☆通常学級での国語、算数等の時間割をできる限り連続にしてみてもいい、本学級でまとまりのある時間を確保する。																							
●①～⑥の流れを経て、合同の時間で行う領域・教科を合わせた指導(日常生活の指導や生活単元学習)、自立活動等の設定を行うため効果的な時間割の作成が難しい。	☆本学級では高学年児童の時間割(専科等)を優先して編成し、低学年児童については、必要に応じて交流学級担当者へ再調整して編成を進める。																							
●国語・算数等個別指導が中心の教科学習については、交流及び共同学習の時間が合わないため、教科やグループ編成の組み合わせがうまくいかず、指導内容や授業づくりが進みにくい。	☆対象児童のいる協力学級の体育や専科(音楽・理科)等、交流及び共同学習の時間をできる限り併せる。																							

④ 時間割編成上の留意点

ア 対象児童のいる協力学級の体育や専科(音楽・理科)等、交流及び共同学習の時間をできる限り併せてもらうように要望した。

イ 協力学級には、可能な限り本学級での時間割編成(生活単元学習・図工・図書室利用等)合同での学習時間の確保に協力していただいた。(現在8名の在籍児童がいるため、本学級児童のそろう時間の確保をねらっている。)

ウ 本学級への理解が進む中、本学級時間割を編成する際の配慮点(生活単元学習・自立活動等のねらいや指導内容、授業時数、合同時間、年間活動計画等)

る場面が増え、交流学习へ意欲的な姿勢が多くなった。特に協力学級では、先生の言葉かけで周りの様子をよく見て行動しようとする成長の様子も伝えられ、調べ学習では、ペアの児童にサポートされながらもワークを板書したり、部分での自己課題への取り組みができるようになってきた。

更に協力学級担任より毎週末に示される次週の学習予定の確認は、協力学級との連携で大きな役割を果たした。学習の様子や周りの子ども達との関わりなど情報を聞くことができた。音楽では、リコーダーの学習において、各小節の一音目の音符を演奏すること、麻痺のある右手の演奏の曲は打楽器に替えたり、本学級での練習時間を設けたり等連携しながら指導・支援にあたり、みんなと一緒に演奏する喜びを味わったり、リコーダーのスキルを高め自信をつけることができた。また、協力学級担任から「観察ノートの記入には、トレーシングペーパーを活用したり写真を貼ったりして対応したいが…」 「各自のまとめは、教科書の写本で対応してみようか？」とアイディアを活かした支援を積極的に相談することが増えた。

② 周りの人に子どもたちのがんばっている様子が伝わるような活動場面の設定

本学級児童にとって協力学級や全校児童の前での発表は、周りの児童に本学級児童のがんばりや活動を理解してもらえる絶好のチャンスになると共に、意欲や自信つける場面となる。そこで、以下の活動等を通して理解啓発や児童の表現活動の場を設定した。

ア 協力学級「朝の会」での発表（本学級や村合同学習での取り組みや案内を発表）

イ 音楽朝会や校内音楽発表会での表現活動（歌やダンス、合奏等の発表）

ウ 休み時間の教室開放「なかよしタイ

ム」

エ 掲示物（学習の様子の写真や子どもたちの作品等、多くの児童に見てもらえるよう教室、廊下、校内作品展等での展示）

協力学級や通常学級学級の児童からは、「〇〇〇学級の発表（手話・ハンドベルの演奏）上手だったね。」「ミニオリンピックでメダルもらえるといいね。頑張って！」など激励の声や「明日は、こま回し勝負しよう。」「この絵本おもしろいよ。読んであげるね。」と積極的に関わる様子がみられた。また、「どうして学校で買い物のお勉強するの？」「教室にシャワーやトイレがなぜあるの？」と本学級の学習に興味をもつ声もあり、本学級児童においては、協力学級担任や児童から多くの激励のことばをもらい、「次は、何発表しようかな？」「〇〇くんと一緒に組体操の練習頑張りたい」と協力学級での活動に意欲的な様子が多く見られるようになった。

③ 協力学級児童への児童理解に関する指導

交流学級では、『すみれ学級のお話』と題してパワーポイントによる本学級児童に対する理解啓発と関わり方や協力願い等についての授業を行った。ここでは、「どの子もいろいろないいところを持っている」ことや「みんな違ってみんないいんだよ」という視点を意識して授業を展開した。子どもたちからは、「縄跳びを教えてあげるよ。」「一緒に学校探検したい」等積極的に関わろうとする声や「泣いたらどうするの？」「いうことをきいてくれないときは？」等のこれまで困った場面での様子の声も多くあがった。いつでも困ったときは、教室の先生や特別支援学級の先生に相談したり、いいことがあったときも教えてほしいことを話し

た。

④ 日常的な情報交換の場

交流ノートや連絡会の場を通して情報交換をすることは、共通理解・連携に有効であった。しかし、十分な時間を確保することができないことも多く、休み時間や放課後等のちょっとした時間でのおしゃべりは授業での様子や連絡がタイムリーで、短時間ではあるが次の指導に生かせる大事なヒントとなった。また、学級だよりを配布することで本学級の様子や活動の情報を提供することができた。

⑤ 家庭との連携

保護者には、本学級との連携の他、協力学級担当者や学年担当者、保護者間の交流を積極的に進めている。交流及び共同学習の活動や児童の様子を伝えるだけ

でなく、学級懇談会や家庭訪問、授業参観、読みきかせ、PTA活動等に可能な限り参加してもらい、所属学級・学年の連帯感を意識して活動できるよう促している。

⑥ 学級経営（※担任及び関係職員・保護者等との連携）の流れ及び留意点

交流及び共同学習や関係者との連携を図るにあたり、時系列に沿った流れと留意点を整理した（表3）。

表3 担任及び関係職員・保護者等との連携の流れ及び留意点

	取り組み事項	留意点
年度末	○特別支援連携会議（校長・教頭・教務・特別支援学級担当者）	・特別支援学級の経営（交流及び共同学習等）、時間割編成等の評価を行い課題解決に向けた体制作りを協議する。
4月	○時間割編成会議（3月末） （教務主任、専科、指導法改善担当者、支援学級担当者）	・校長のリーダーシップの基、協力体制で推進する。 ・特別支援学級の時間割編成の手順を確認する。
月上旬	○職員会議 ・特別支援教育校内支援体制作りについて（特別支援教育コーディネーター） ・特別支援学級の経営説明	・本学級の経営方針や児童の障害の状態や特性、交流学級及び共同学習の進め方について提案。 ・支援学級在籍児童・通常学級支援児童への支援体制への理解と協力願い…学年部（担外職員の配置）
開級式まで	○協力学級担当者、学年部担当者との連絡会 ・交流計画、個別の指導計画について	・開級式までの流れ（新学期交流期間計画）について共通理解を図る。 ・個別の指導計画や引き継ぎ資料等に基づいて、支援体制や連携の進め方について話し合う。
	・各学級（児童）への支援及び担任との連携	・開級式まで（1週間前後）は、協力学級での交流及び共同学習を中心に進める。（弾力的運用）
	・開級式の準備（関係職員、保護者への連絡）	・学級担任は、1年生・新規児童を優先してT・T授業、必要に応じて協力学級へ授業支援。
	○開級式	・開級式に向けた児童への指導（挨拶や自己紹介、歌、プログラム等）を本学級で進める。
	○協力学級担当者との連絡会	・交流及び共同学習における児童のねらい、交流方法、内

4 月 下旬	・交流ノートの活用について ○家庭訪問実施計画 ・協力学級担当者への協力依頼 ・保護者への連絡 ○協力学級担当者、学年部担当者との連絡会 ・校外行事等での支援体制について（春の遠足児童引率） ・各学年との交流及び共同学習計画の立案	容、連携について共通確認する。 ・家庭での様子、支援状況、保護者・本人の願いを知る。 ・協力学級でのこれまでの交流及び共同学習の様子や児童のねらい、今後の方針を共通理解する。 ・個別の指導計画についての検討を進める。 ・校外行事等の児童引率・支援の体制について共通理解を図る。 ・児童の特性（健康状態、コミュニケーション、食事、排泄、遊び、安全面等）への配慮事項の確認
5 月	○養護教諭、協力学級担当者、学年部担当者との連絡会 ・学年との交流及び共同学習計画の立案 ○村特別支援学級研究会の開催 ○特別支援学級担当による特設授業の実施 ・本学級・児童への理解啓発のための授業	・学年との共同学習について、単元や時期、ねらい、学習内容を話し合う。 ・プール（水遊び）への安全指導及び安全管理について（プール管理人との連携） ・村特別支援学級研究会の開催（会則、年間活動計画及び担当割り当て等） ・合同学習「ミニオリンピック」実施計画立案 ・児童理解に関する特設授業（T・T授業）…交流学級中心に順次行う。 ・児童の特性、学級の一員としての仲間作り（学習・生活での関わり）、本学級での生活の様子について理解を促す。
6 月	○協力学級担当者との連絡会 ・各教科等交流及び共同学習について中間評価 ・学級訪問 ○就学指導委員会 ○村特別支援学級合同学習「ミニオリンピック」	・交流及び共同学習での授業の様子、ねらいの達成状況についてよい点や課題を話し合う。 ・特別支援教育コーディネーター→児童理解に関する特設授業（T・T授業）…要望のある学級 ・水曜日（1校時）の時間を設定する。 ・特別支援教育校内委員会（組織…就学指導委員会含む）での就学指導、教育相談の実施 ※必要に応じて継続 ・保護者との連携（授業参観日を活用した親子演技・種目の練習）
7 月	○学期末通知票（評価）について ※学期末評価については、事前に評価内容、基準を話し合う。 ○保護者面談（個人面談）の実施	・個別の指導計画のもと交流及び共同学習での様子や成果等を評価し、保護者への評価の項目や方法を確認する。 ・個別の指導計画の評価、再検討 ・夏休みの過ごし方、地域子ども会での活動連携について話し合う。
夏期 休業	○本学級行事（ピクニック）の実施 ○家庭・地域との連携 ○校内研修及び支援部連絡会	・ピクニックへの協力願い ・生活安全パトロール、地域子ども会行事への参加 ・夏休みの生活状況の把握

中	・特別支援教育に関する研修会 ・1学期交流及び共同学習の評価	・交流及び共同学習については、協力学級担当者の意見や要望等を受け止め、今後の方針を協議する。
9月	○協力学級担当者、学年部担当者との連絡会 ・2学期交流及び共同学習計画の立案	・運動会、校外行事、地域老人会、単元による交流及び共同学習について1学期の評価を基に計画を検討する。 ・村特別支援学級合同学習「カレーパーティー」計画
10月～11月	○協力学級担当者、学年部担当者との連絡会（※5学年宿泊学習、6学年修学旅行について） ・村特別支援学級合同学習「カレーパーティー」（10月）	・児童の実態や健康・安全面を考慮し、日程やグループ編成、参加内容等を家庭、養護教諭、学年部と協議する。
12月	○村特支学級合同学習「暮れの街見学 ○学期末通知票（評価）について ・事前に評価内容、基準を話し合う。 ○学級懇談会の実施	・個別の指導計画のもと交流及び共同学習での様子や成果等を評価し、保護者へ伝える。 ・2学期個別の指導計画の評価、修正
1月～3月	○協力学級担当者、学年部担当者との連絡会 ○交流及び共同学習の反省 ○特別支援教育連携会議の実施 ○次年度時間割編成会議	・学芸会、1・2学年「みんなあつまれ、わくわくランド」交流及び共同学習計画 ・校内、校外による交流及び共同学習の反省を担当者間で協議する。

協力学級担当者や学年支援部（担任外職員）との連絡会を計画的に実施し、評価に至る過程を進めることができた。児童の様子や支援の状況、成果や課題を話し合うことができた。協力学級担当者からは、見通しを持った活動計画が立てられ安心して指導・支援に臨めたことや教室での具体的支援、配慮事項を頻繁に情報交換できてよかったとの声があった。

⑦ 年間指導計画作成について

年間指導計画は、各教科や道徳、特別活動、自立活動及び総合的な学習の時間について、学級の指導目標、指導内容、指導方法を定めたより具体的な計画である。学校や地域の特性等も考慮した計画を進めるにあたり、本学級では、これまでの様式・項目を見直し、本学級と各学年、村特別支援学級との合同学習「交流及び共同学習」や食育に関連した項目を追加した。特に、本校は2年間、食育推進事業の中心校とし

て「望ましい食習慣を身につけた心身共に健康な児童の育成～栄養教諭を中核とした食育の十充実～」を目指した取り組みを推進してきた。本学級の年間指導計画では、「食に関する指導の全体計画」や「食に関する各学年の目標と指導計画」と照らし合わせた指導内容を追加し、特別活動、給食指導、生活単元学習（栽培活動、調理活動等）との関連を図った。

6 成果と課題

（1）成果

① 教育課程を大切にしたい時間割の編成について、これまでの作成の手順の問題点を協議し、解決に向けた体制作りを進めることで全職員への理解と協力を得ることができた。また、これまでの学級担任中心の特別支援学級経営への取り組みから、学校長のリーダーシップのもと協力体制で進めることができた。

- ② 交流及び共同学習についての取組や課題について、関係職員と話し合いを進めながら取り組むことができた。協力学級担任との連携については、事前の打ち合わせや交流ノートの活用を進めることで、児童のニーズを把握し個に応じた指導・支援に繋げることができた。
- ③ 時間割編成の工夫や関係職員との連携を深めたことで、児童の生き生きとした活動が多く見られた。
- ④ 年間を通した学級経営の流れや留意点を整理するとことで、関係職員や保護者等との連携や学級経営について計画的に進めることができ、評価・改善に繋げる手がかかりとなった。また、本学級年間指導計画を改善したことで、各教科や領域、行事等での関連や交流及び共同学習への見通しが持て、協議・連携を推進する一助となった。協力学級の担当者や関係職員との連絡会では、「交流及び共同学習」での課題や共通理解を目指した取り組みを進めることができた。

(2) 課題

- ① 転入児童の時間割編成については、学級全体と調整することが厳しくニーズに応じた時間割編成ができなかった。また、在籍児童が多く全学年にまたがっていることで多くの調整事項があり、継続して理解・協力を得る必要がある。
- ② 特別支援教育コーディネーター（校務分掌）としての通常学級担任及び関係者との連携を含め、協力学級担任一人一人との連携では、情報交換や連絡会等の時間の確保においてより効果的な連携のあり方を考える必要がある。
- ③ 本学級年間指導計画については、単元、本時のねらいや指導内容の充実、学校・地域の特性を更に生かし、児童のニーズに応じた指導の工夫・改善を進める必要がある。

Ⅲ 児童の障害特性に応じた効果的な教科学習の在り方ー自閉症・情緒障害特別支援学級における教育課程の編成や具体的な支援の工夫ー

1 問題の所在

本校に設置されている自閉症・情緒障害特別支援学級（以下、「本学級」という。）には、現在1名（4年生）の児童が在籍している。児童の知的発達水準は比較的軽度な状態にあるが、教科によって理解力に大きな差があるために、教科学習の内容を考慮して特別支援学校学習指導要領における各教科に替えたり下学年対応による指導を実施している。

本学級では、児童の実態と在籍が1名という状況を勘案し、これまで一部の教科学習において通常学級在籍児童や本校の知的障害特別支援学級在籍児童との小集団合同学習を展開してきた経緯がある。

しかし、実際の指導を実施する上で、2つの特別支援学級それぞれの教育課程の編成と年間指導計画の調整が難しい状況にあった。

そこで、本研究では、在籍児童の実態に応じた教科学習の展開を図る上で、教育課程編成のあり方や具体的な指導の留意点について整理することで、教科学習の充実が図れるのではないかと考えた。

2 ねらい

本研究では、児童の障害特性に応じた教育課程の編成を工夫し、活動内容や指導形態の工夫と教科学習における具体的な配慮事項等について検討し、効果的な教科学習の在り方を实际的に探ることをねらいとする。

3 研究の仮説

本研究のねらいを達成するために、以下の仮説を設定した。

- (1) 知的障害の状態との障害の特徴を考慮した上で、算数科における年間指導計画の中に知的障害特別支援学級との教科学習を設

定し、合同学習等の指導形態を工夫することによって、意図的・計画的な教科学習を展開できるであろう。

- (2) 児童の興味・関心を生かした活動内容や実態に応じて読むこと・書くこと・聞くこと等の体験的な活動を取り入れることで筋道を立てて考える力を高めることができるであろう。

4 内容と方法

本学級は在籍が1名であることから、少人数による学びあい学習のなかで、他者（児童）を意図した「聞く」「話す」という言語活動ができる機会を作るために算数科における年間指導計画の中に一部の領域（量と測定）について、知的障害学級に在籍する児童との合同学習を位置付け、学習内容については下学年対応で指導を行うこととした。

5 検証

算数科の授業を通して、2つの仮説を検証する。

仮説(1)の検証として、算数科の「量と測定」の単元を通し、その領域の指導を効果的に行うために、少人数編成による合同学習を位置づけ、指導することとした。仮説(2)の検証として、身近な材料を実際に持ったり測ったりする場を設定し、したことや考えたことを「ノートに書く」活動を取り入れて行うこととした。全単元から継続してノート指導においては学習の流れに沿って「学習のめあて、予想、結果、感想」の順にパターン化した記述で行った。

(1) 指導の実際

① 事前指導の工夫

対象児童らはこれまでに、この学習形態による2回の学習を行ってきた。本単元もこれまでの指導を継続しながら、生活単元学習の調理学習と関連させて、実際に「小麦粉の重さを測定することができる。」ことをねらいにおいて指導を行うこととした。

② 授業の展開

以下の指導案に基づき授業を実施した。

算数科学習指導案

1 単元名 重さ（3学年適応）

2 単元の目標

重さの概念を理解し、簡単な場合について測定でき生活の場面で活用できるようにする。

- (1) はかりの使い方が分かり、重さの単位（g kg）を知り、上皿自動ばかりなどで重さを量ることができる。
- (2) 重さを「○g グラム」「○kg キログラム」と読んだり、書いたりでき、1kgは1000gであることが分かる。重さにつての簡単な加減ができる。
- (3) 形が変わっても重さは変わらないことが分かる。

3 単元について

(1) 教材観

子どもたちは日常的にものを持ったりする中で重い・軽いなど重さについての経験をしたり、生活単元学習においても、学級担任が秤を使って材料の重さを測定したりする場面を目にしている。そこで本単元は、なかよし学級との合同学習で行っている総合的な学習の時間の「おきなわ まあさん たんけんーおきなわそばの麺をつくろうー」での材料の小麦粉等を分量通りに量る場面と結び付けた。そして、生活の場で出会う表示された重さの単位を理解し、具体的に簡単な測定ができるようになることをねらいとしている。そのために、持ったり図ったりする体験的な活動を多く取り入れることを通して量感を育て、実際に学習用具やくだもの等身近なものの重さを比較するため

に秤が必要となる場面を設定して、g や kg を使ってその重さを表せるようにする。

(2) 児童観

本学習グループは、自閉症・情緒障害学級と知的障害学級に在籍する異学年の児童3名（4年1名、5年1名、6年1名以下A児、B児、C児とする。）で構成されている。3名の児童の知的発達については同程度であり、基本的な生活面では自立している。これまでに長さやかさの単元において合同学習を行ってきたが、体験的な場面でのB児やC児の発言、A児のひらめきの良さなどがお互いに刺激になり競いあう場面も多く、合同学習をととても楽しみにしている姿が見れた。今回は3単元目となる。

(3) 指導観

重さを比べるときには、まず手にとって重量感をつかむ直接比較やどれが重いかを予想させるなど経験をもとに体感を大切にしたい指導を図りたい。その上で、上皿自動ばかりを使って材料をのせると針が右方向に動くことを確認させ、針の動きが大きいほど重く小さいほど軽いという秤の仕組みの確認や間接比較の良さを実感させたい。また、生活単元学習と関連させながら、身近なお金である1円玉を使って1gや100gの重さを体験させることで「重さの単位」を生活と結び付けたい。そして、体重計や時代の流れに沿ってデジタル表示のはかりも利用できるよう容量や形態の違ういろいろな秤を用意し、用途に応じた秤の選び方や目盛りの読み方を理解させるなど、常に生活場面での活用につなげることを念頭に置いた指導を心掛けたい。

4 単元の指導計画（8時間扱い）

教科領域	ねらい	学習内容
算数 1時間	- 重さを比べるには、直接比較や間接比較をすればいいことが分かる。 - 秤の使い方を理解する。	- 直接持って重さ比べをする。 - 形や材質、大きさの違うものの重さを調べる方法を考える。
算数 2時間 1/2本時	1gや100gの量感をつかむ。 - 重さの単位（g）を知り、上皿自動秤で重さを量ることができる。 1目盛りの示す重さが分かる。 - 重さの単位（g）とその書き方・読み方を理解する。	1円玉100個の重さを測定する。 1円玉の重さを体験する。 - はかりで様々なものの重さを量り、グラムで表す。 - 重さの単位（g）とその書き方・読み方を練習する。
算数 1時間	変形しても量が同じであれば重さは変わらないことを理解する	粘土の変形を通して、重さの保存性について考える。
算数 1時間	1kgの量感をつかむ。 1kg=1000gを理解する。	大きな重さを量る単位（kg）を知り、1kgの水や砂袋を作る。
算数 3時間	- 重さの簡単な加減ができる。 - 簡単な測定ができる。	- 秤っこゲームをする。 - 重さについて簡単な加減を学習プリントや秤を使って練習をする。

関連事項

領域	ねらい	学習活動
生活単元 1時間	生活の中で重さの単位（g kg）やかさの単位（ℓ ml）を活用できる。	クッキングの学習に使う材料（小麦粉や水などを測定する。

図工 1 時間	・同じ重さの粘土を使っていろいろな形を作ることができる。	・同じ重さの粘土を使って、いろいろな形を作る。
体育 1 時間	・からだの大きさが大きければ重さも重いことが分かる。	・お互いにおんぶして重さを感じながら歩く。

5 本時の指導 (2 / 8 時)

(1) ねらい

- ① 1 g や 100g の量感をつかむ。
- ② 重さの単位 (g) を知り、上皿自動秤でいろいろなものの重さを量ることができる。

(2) 授業仮説

- ① 課題解決の場において、1 円玉の入ったビニール風船と何も入っていないビニール風船を持って比べさせることにより、1 g の軽さを実感するであろう。
- ③ 題解決の場において、既習事項である「秤の使い方」や物差しなどの目盛りを想起させることにより、正しく秤を使って目盛りに注目すれば重さを量ることができることに気づくであろう。

(3) 児童の実態

児童	生活面及び算数科に関する実態	本時の目標
A 児 4 年	話しかけられてもあまり返事ができず、混乱や不安があると手をひらつかせるなど人との関わりでの困難さや言葉の発達の遅れがある。計算領域では当該学年の理解があるが、文章問題の内容理解が困難なため、その技能を十分に活用できない。正確に測る意味理解が十分でない。	・「風船みたい」など 1 g の軽さを表現する。・目盛りをみて g と読む。
B 児 5 年	できないことやわからないことがあっても口を閉ざしてしまうことがある。かけざん九九についてはほぼ習得しており、3 年生程度の学習を行っている。体験的な学習場面での発言は、しばしば学習をリードすることがある。	・C 児の発表を参考に 1 g の軽さを発表する。・目盛りを見て g と読む。
C 児 6 年	穏やかな性格で特に A 児のことを気にいってじゃれあって遊んでいる。繰り下がりのある引き算が苦手、かけざん九九の習得もまだ十分ではないが、語彙が豊富で積極的に発言し他の児童のお手本となることが多い。本学級での学習に意欲的で、授業終了後は、その内容を細かになかよしの担任に伝えることができる。	・2 つの袋を比べてその違いを発表する。・100 g など端数のない重さを読む

(4) 板書計画

11/4 (木) めあて	重さ ◎ 1 円玉の重さを調べよう。 ◎ 秤でもものの重さをはかろう。	感想	②はかりではかってみよう。 1 つのめもりは、() g です。 ○リンゴ () ○みかん () ○本 () ○ねんどのかいじゅう ()
問題	・ 1 円玉 100 個の重さは、() ・ 99 個では、() ・ ・ 2 個では、() ・ 1 個では、() です。 ◎ 1 円玉 1 個は 1 g です。 ◎ 1 g の重さは、 () です。		

(3) 結果

対象児の障害の特徴から、他者を意図した言語活動ができる機会を多く作りたいと考え、量と測定の領域における「重さ」の単元で、合同学習による教科学習を行った。授業では、身近な材料を持ったり実際に秤を使って図ったりするなどの体験的な学習をふんだんに取り入れた。また、学習したことを振り返ったり活用したりするために、ノート指導も合わせて行った。ノート指導では、学習の流れに沿って「めあて、予想、結果、感想」の順で統一してノート記入を行った。児童にとっては、本時の学習のめあてが明確になり、めあてにもとづいて感想を考える手立て、授業の流れもパターン化も図れると考えたからである。その結果、毎時間の前時の振り返りの時には、ノートを見ながら思い出す場面や記述をもとに自信を持って発表する姿も多く見受けられた。合同学習を重ねるごとに、「体験的な学習場面での発言が、しばしば学習をリードすること」や「語彙が豊富で積極的に発言したことが他の児童のお手本となること」、「視覚的な情報に対する強さや記憶力の良さを認めてもらうこと」などの経験を積むことによって、子どもたちは、発言が活発になり生き生きと授業に取り組むようになっていった。

7 考察

算数科について、年間指導計画の中に児童の実態を考慮して指導形態を工夫して教科学習を位置づけた。今回は、主に量と測定の領域で少人数編成の合同学習を行った。その結果、児童の発言や行動から声をかけ合って学び合う場面が多く見られた。また、授業中の児童の発言やノートに記入した感想文からも、学習内容の理解が進んだことが伺えた。「算数の時間はいつですか？」などの発言や休み時間から学習の準備の取りかかる様子から、教科学習の時間を楽しみにしてくれていることが感じられた。以上のように、指導形態を工夫し、さまざまな体験的な活動を多く取り入れることにより、効果的な学習が展開できたと

いえる。

8 まとめ

本研究では、特別支援学級に在籍する児童が、自立し社会参加するために必要な知識や技能、態度などを身につけるための効果的な教科指導の在り方について検討することをねらいとした。

その結果、①児童の特徴や学習上の特性を踏まえ教育課程の編成を工夫すること、②児童の興味・関心を生かした活動内容を工夫すること、③指導形態を工夫すること、④授業の中で体験活動や読む・書く・聞く等さまざまな活動を展開することなどが、教科指導に効果的であることが示された。

IV 豊かなつながりを作る「交流及び共同学習」の在り方ー障害のある児童の特性に応じた教育課程の編成と具体的な支援の工夫ー

1 問題の所在

「交流及び共同学習」は、障害のある子どもと障害のない子どもが理解し合うための絶好の機会であり、同じ社会に生きる人間として互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学ぶ場であると指導要領にも明記され、学校の教育活動全体を通じて、計画的、組織的に行うことが大切である。

本学級では、保護者の要望もふまえて教育課程の中に、「交流及び共同学習」の位置づけを重視し、学校行事や総合的な学習の時間、特定の教科をとおして、活動を共にする直接的にふれあう活動や作品の交換や手紙のやりとり等の間接的な活動を計画してきた。また、通常の学級と生活の場を共有していくことから、その利点を生かし日常生活での交流（休み時間、給食や清掃場面など）も子どもの実態に応じて積極的に進めている。

しかし、「交流及び共同学習」を円滑に進めるためにも、特別支援学級と通常の学級との間で事前の指導や事後の指導、それに関わる人たちの連携の難しさが課題として挙がっている。さらに、

日々の活動の根拠となる教育課程にどのように位置づけ、個別の指導計画、学校（学年・学級）行事計画に反映させていくのか明確に示されることが求められている。

そこで、本研究では、課題となっている通常の学級における特別支援教育の視点や教師間の連携を取ることで子どもたち一人ひとりが「交流及び共同学習」を通して楽しく学校生活を送れるのではないかと考える。

2 本研究のねらい

特別支援学級と通常の学級との「交流及び共同学習」をとおして、児童一人ひとりの障害の程度や特性に応じて、教育課程の編成を工夫し、教育活動（教科など）の選択や活動内容・方法の工夫、併せて教科学習における配慮事項について検討を進め、より良い「交流及び共同学習」の在り方を探ることをねらいとしている。

また、対象となる特別支援学級在籍児童及び通常の学級在籍児への指導目標を以下のとおりに設定した。

(1)特別支援学級の児童

交流及び共同学習を通して、学習のルールを守りみんなと楽しく学習し、教科のねらいを達成することができる。

(2)通常の学級の児童

交流及び共同学習を通して、対象児についての理解を深め、自分の生活や生き方について考えることができる。

3 研究の仮説

本研究のねらいを達成するために、以下の仮説を設定した。

(1) 通常の学級在籍児への障害理解を促すための教育活動を図っていくことで、円滑な「交流及び共同学習」を展開することができるであろう。

(2) 「交流及び共同学習」に参加する前に特別支援学級において、学習スキルの練習などの事前指導や事後指導、担任同士の連携を図る

ことで、児童一人ひとりが目的を持って「交流及び共同学習」に参加し、個々のねらいが達成できるであろう。

4 研究の内容と方法

特別支援学級に在籍する児童の該当学年（交流学級）の教科学習における「交流及び共同学習」を現行の教育課程にしたがって指導計画を立て、児童の実態に応じた教育の目標の設定、具体的な単元の選択、指導内容・方法の工夫を図り、特に、事前指導及び事後指導の具体的な取り組みを以下のように図ることにした。

なお、対象児童A児は、小学2年生で、頭蓋骨縫合早期癒合症、網膜色素変性症で頭部保護のためのヘッドギア、眼鏡をかけている。今年度、初めて会ったときはほとんど言葉もなく、質問に対してもうなずいたり、促すと指でオッケーの合図をする程度であった。

協力学級担任との話し合いでは、意思疎通が取れないと不安にさせるので、無理のない「交流及び共同学習」を組むことにした。

(1)特別支援学級の在籍児童が交流する通常の学級において、通常の学級在籍児童へ障害理解を促す指導を計画し、具体的な言葉かけの工夫や身体的な配慮などの工夫を実践・検証を図る。

(2)通常の学級に在籍する児童の中で特別な支援を必要とする児童についても配慮を図っていく。

(3)特別支援学級及び通常の学級の担任間で情報の共有を図るために、「OK ノート」の活用をとおして連携を図る。

5 検証①

通常の学級担任との連携をとおして、仮説(1)を検証する。

仮説(1)の検証として、道徳や学校生活全体をとおして、通常の学級在籍児に対する障害理解の授業を行ったり、協力学級担任が行う学級での配慮の工夫について取り組むことにした。

(1) 指導の実際

① 2 学年 B 児と通常学級との関わり

ア ねらい

〈A 児に対して〉

各教科のねらいの達成と共に人との関わりやコミュニケーションの育成をねらいとする。

〈通常の学級（協力学級）の児童に対して〉

学校生活の中でのふれあいを通して、障害のある友だちを理解し、仲間として認め合い共に助け合おうとする思いやりの心の育成をねらいとする。

イ 仮説

〈A 児に対して〉

「交流及び共同学習」に参加する前に事前学習を進めることにより、自信を持ち、楽しくみんなと学習することができるであろう。

〈協力学級の児童〉

年度当初に特別支援学級児童への対応の仕方や言葉かけの仕方を話すことで交流学級の子どもたちも自分なりの関わり方を見つけ出すことができるであろう。

② 実際の活動

ア 協力学級との交流及び共同学習

主に、音楽、体育、生活科、給食、掃除場面を設定した。

イ 配慮すること

事前学習として、A 児に対しては教室移動や学級外では保護帽の着用し、給食、掃除は自分でできることは自分でやるよう促した。

手伝って欲しいときは、自分で言ったり、合図をすることを教示した。

また、協力学級の児童及び担任に対しては、体育でのソフトバレーボールの使用（ボールを怖がる個への配慮）や座席の配慮を行った（隣に座る子への指導、かかわり方、役割）。また、「今、できること」「手助けが欲しいこと」の確認を促した。

③ 成果と課題

協力学級担任が体育の時間にソフトバレーボールを

活用してドッチボールをしたり、当初体育に行くことを嫌がっていた A 児を体育係にすることで意欲的に参加するようになった。また、協力学級児も A 児にボールが当たらないようにカバーする姿も見られた。

図画工作の時間に参加できそうな学習に誘ってもらうことで尚一層、クラスの一員としての気持ちが芽生え、友だちの温かさを感じたようだ。

あまり言葉もでなかった A 児が休み時間になると会話を楽しんだり、自分から友だちと関わろうとする気持ちも芽生え、近所の友だちと誘い合って下校する姿も見られた。

今後の課題として、発達に応じた通常の学級の子どもたちへの障害理解の授業を取り組むことが課題として残された。

6 検 証②

特別支援学級在籍児童である小学 4 年生の B 児を対象に、国語科の授業をとおして仮説(2)を検証する。B 児は、

仮説(2)の検証として、国語科の単元「にた意味の言葉」をとおして、特別支援学級に在籍する児童の該当学年（交流学級）の教科学習における交流及び共同学習を現行の教育課程にしたがって指導計画を立て、児童の実態に応じた教育目標の設定、具体的な単元の選択、指導内容・方法の工夫を図り、特に事前指導及び事後指導を具体的に取り組むことにした。

(1) 授業の実践

① 事前指導の工夫

ア 本単元の導入段階として、対象児童（小学 4 年）の特性を理解し、「にた意味の言葉」について興味を持たせるための指導を行った。

イ 学習のルールをあらかじめ絵カードで視覚化し理解を促した。

ウ 教科書に出てくる言葉についてふれておく。

エ 正しい態度や行いは、「この態度や行いが良いんだよ」と合図を送った。

オ OKノートを活用して、学級間の情報の共有化を図った。

②授業の展開

巻末資料3を参照

(2)成果と課題

①成果

B児も動作化やゲーム、絵カードの活用で授業に参加することができた。また、協力学級児も特別支援学級児もみんなと一緒に学習できることを知ることができた。

協力学級担任、特別支援学級担任でチームティーチングを行うことで、通常の学級に在籍する特別に配慮の必要のある子への支援も図ることができた（絵カードの活用や机間巡視で個別に指導）。

②課題

教科学習では、それまでに身につけていないことが多く、協力学級担任とのより細かな打ち合わせが必要である。また、授業後のB児の評価をどのように具体的に設定するか、その工夫が求められる。

7 考 察

協力学級担任の細かな配慮で、教科学習に参加することができたことや

また、

OKノートの活用により、タイムリーにその日の調子を通常の学級担任へ知らせたり、学習の様子を書き込むことで連携も円滑に図れた。

今後、更なる障害理解や通常の学級で行う具体的な配慮についても通常の学級担任と情報を共有し、相互に研鑽を深める必要である。

8 まとめ

今回、通常の学級担任との連携を図ることで特別支援学級児童が通常の学級の児童と教科学習に参加でき、事前に学習し、事後で良かったことを誉めてあげることで特別支援学級児童も自信を持って参加することができた。通常の学級で学

習することができ自分も「やればできる」という自尊心が高まったことも大きな成果である。

また、通常の学級の子どもたちが特別支援学級の子どもたちを学級の一員として迎え入れたことが大きな成果と考える。

月一回の校内連絡会において特別に配慮の必要な子の具体的ななかかわり方を知らせたり、先生方の関わりの良かったことなどを取り上げることで先生方一人ひとりの意識も変わってきた。

今回の取り組みの結果を基に、これまでの「交流及び共同学習」の幅も広がり、通常の学級の子の特別支援学級児への対応の仕方にも良い変化が見られるようになった。

今回の検証をとおり、障害のない子も障害のある子共、互いに理解し合うという良い結果を得ることができた。

今後も私たち教師がまず子どもたち一人ひとりを理解し、可能性を信じ、教育課程を編成していかなければいけないと感じた。

V 自立活動の観点を基にした個別の指導計画の活用と授業の工夫

1 テーマ設定の理由

特別支援学級に在籍する児童の構成を概観すると、多くの学級では異年齢集団で個人差の大きい子どもたちが在籍する実態が浮き彫りにされている。一人一人の思いを大切にする授業は、障害の種類・程度や発達の状態等に応じて、学校のエデュケーション全体を通して配慮する必要がある。しかし、その現状は、教科学習が中心になり、教科という指導の中での部分的な取り組みになりがちで、多くの担当者が一人一人の実態に応じた指導をどのように展開すればいいのか行きづまっている。そこで、多様な状態像をみせる特別支援学級の児童のエデュケーションを、実態に応じて系統的・継続的に編成し、効果的な学習指導を工夫することが大きな課題としてあげることができる。

特別支援学級のエデュケーションは、通常学級のエデュケーションに準ずる教育を行うこととしているが、障害の

ある児童の教育課程は、その障害によって日常生活や学習場面において様々なつまずきや困難が生じることから、通常学級の教育課程で教育するだけでは一人一人の教育的ニーズに応じた授業を展開すると難しさが生じる。

本学級においても、学級経営の際に頭を悩ますのが時間割編成で、その基となる教育課程の編成は一人一人の障害の特性や教育的ニーズの把握から始めるよう努めている。本学級は知的障害特別支援学級として設置され、現在6名の児童が在籍しているが、その実態は知的障害を有する児童、知的な遅れはないが白血病とアスペルガー症候群を併せ有する児童、亜急性硬化性全脳炎による重度重複障害で特別支援学校判断を受けている児童など、多様な状態像を見せる児童が在籍している。そのため、本学級の児童の障害の状態等を考慮すると、通常学級の教育課程をそのまま適用しても効果的な指導は望めないため教育課程の編成には工夫が必要である。

学校教育法施行規則第138条に「特に必要がある場合は、特別の教育課程によることができる」と規定されており、小学校学習指導要領解説総則編では「特別支援学級において特別の教育課程を編成する場合には、学級の実態や児童の障害の程度等を考慮の上、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領を参考とし、例えば、障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とした指導領域である『自立活動』の内容を取り入れることができる」などして、実情に合った教育課程を編成する必要があることが示されている。本学級の教育課程も、その実態から、特別支援学校の教育課程を取り入れることによって、効果的な指導が期待できる。特に個の児童が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うことを目的とする自立活動は、多様な障害に応じた指導を充実させるため重要な意義をもつと考えられる。しかし、自立活動は、その

目的から個別指導という指導形態が効果的であるが、異年齢集団で個々の能力差が大きいという特別支援学級の特性から、教育課程にどのように位置づけ、時間をどのように確保するか難しいところがある。また、自立活動のどの観点を実際の指導に取り入れるのか悩むところが多い。

そこで、自立活動の指導をどのようにして教育課程上に位置づけ、内容を具体化し、個別の指導計画を基に児童の教育的ニーズをどのように反映させ、個々の目標を具体的にし、どのように組み合わせる効果的に展開していくのかを検討するため、本テーマを設定した。個別の指導計画と自立活動との連動を念頭に置くことで、多様な実態の子どもたち一人一人のニーズに応じた効果的な指導の展開が図れることを期待する。

2 研究仮説

- (1) 自立活動の目標及び指導内容を整理し、個別の指導計画に反映させることで、個のニーズを的確に把握することができるであろう。
- (2) 自立活動の視点から個のニーズを把握することで、ニーズに応じた具体的な指導や必要な支援及び効果的な指導形態が明確になるであろう。

3 内容と方法

- (1) 自立活動の観点を3要素に整理し、その観点を個別の指導計画や支援者間を繋ぐ個別の教育支援計画に取り入れた様式を作成し、授業で活用する。
- (2) 異年齢で構成される特別支援学級の課題をあげ、解決に向けた取り組みを図る。
- (3) 自立活動の視点を活かした指導を指導形態別に検証し、その効果を検証する。

4 研究の実際

- (1) 機能する個別の指導計画の作成
 - ① 自立活動の目標と内容の整理

自立活動の内容は、今回の学習指導要領改定に伴い、これまでの「健康の保持」「心理的な安定」「環境の把握」「身体の動き」

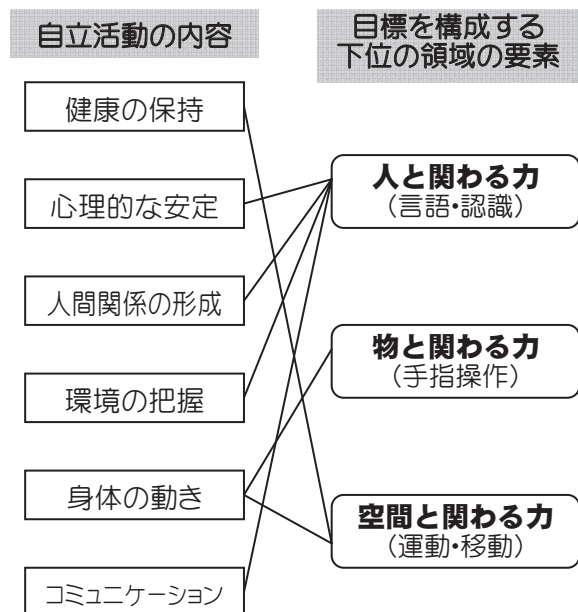


図1 自立活動と三要素の関係

「コミュニケーション」の5区分に、「人間関係の形成」が新たに加えられ、6区分26項目となっている。そこで、自立活動の区分を「人と関わる力（言語・認識）」「物と関わる力（手指操作）」「空間と関わる力（運動・移動）」（以下、三要素）に割り振り、児童の指導目標を構成する下位の領域の要素として捉えた（図1）。

② 一人一人の思いを繋ぐ個別の教育支援計画の策定

個別の教育支援計画は、児童を囲む支援者が相互に理解を深め、役割分担をすることが児童の生きる力の一助となり、個別の指導計画の基にもなる大事な繋ぎの計画である。本学級では、4月の家庭訪問で話し合い、5月下旬頃までには確定し個別フ

ァイルで保管した。様式を1、2と用意し、様式1は家族構成や生育歴、これまでの支援等、プロフィールの把握、様式2は生きる力を「学校・家庭生活面（身の回りのこと）」「余暇・地域生活面（余暇を楽しむこと）」「進路・就労面（働くこと）」の3つを柱とし、この観点から生活課題を検討するように様式を整えた（図2）。この生活課題の手だてを「人と関わる力」「物と関わる力」「空間と関わる力」で分析することで、自立活動の視点から児童の指導目標がいつでも確認できるようにした。また、様式2には、生活マップや外部機関への提供の可否を保護者に伺い、その意志を記す欄も設けた。

（2）本学級の抱える課題

① 多様な状態像をみせる児童の実態

知的障害のある児童の学習上の特性として、習得した知識や技能が不均衡だったり、断片的になりやすかったりするところがある。そのため、習得した知識や技能が実際の生活には応用されにくい傾向があり、抽象的な指導内容よりは実際の・具体的な内容が習得されやすい傾向がある。このような特性から、次のような手だてを基本とすることが重要である。

ア 児童の興味・関心を引く教材教具を用意し、目的が達成しやすいように段階的な指導を工夫する。

イ 環境を調整し、自発的、自主的な活動を大切にする。

様式1

個別的教育支援計画

〇〇〇小学校
平成 年 月 日作成
記入者()

児童名	(男・女)		生年月日	平成 年 月 日生	
保護者氏名			連絡先電話番号		
住所	〒				
家庭環境 家族構成 ()名 ※本人も入れて下さい	氏名	年齢	続柄	職業	保護者・兄弟姉妹との関わり等 主に関わる人()
健康状態				診断名(障害名)	
				診断機関名()	
療育手帳(有・無)			身障者手帳(有・無)		
生育歴 健診歴	乳幼児検診(こば・運動・情緒行動の発達)		(健診結果)		
	妊娠期間:		1歳半健診:		
	出産期:				
	乳幼児期:				
就学時健診					
	学級担任名	検査結果			
幼稚園		検査機関			
1学年					
2学年					
3学年					
4学年					
5学年					
6学年					

小学校までの様子は、現在の本人の特性を理解する上で、重要な情報になる。

生活課題は、優先順位をつけて、個別の指導計画へと転記し、指導の中に保護者や担任の思いだけでなく、本人の思いも照らし合わせるようにした。

「～ができない」という表記ではなく、「～までならできる」など肯定的な表現にする。

外部関係機関への提供の可否を保護者からもらう。

生活マップから児童をとりまく支援者を確認し、繋がるように工夫する。

(生活支援マップ)

学 校	支援の状況(支援レベル)
幼稚園	
1学年	
2学年	
3学年	
4学年	
5学年	
6学年	

家庭

本人

地域資源

医療機関

図2 自立活動の観点と生きる力の観点を取り入れた個別的教育支援計画の様式

ウ 生活に結びついた実際的かつ具体的な活動を学習の中心に据えた授業の展開を図る。本学級には自閉症の特性を併せ有する児童も在籍するため、特性に特化した指導に特に配慮する必要がある。

② 教育課程の編成の困難さ

教育課程は、児童の発達段階や経験などを踏まえ、実生活に結びついた内容を中心に構成していることが大きな特色である。知的に障害があると、メタ認知能力の形成が困難で、通常教育で行われる教科書中心で知識を積み上げる学習ではなく、体験的、実際的な活動を通しての授業が生活に結びつき有効である。このような特性から本学級では、特別支援学校の教育課程を取り入れ、実態に応じて「日常生活の指導」や「生活単元学習」等の領域・教科を合わせた指導で自立的な生活に必要な事柄を

実際の生活の流れや実際的・総合的に学習できるようにしている。しかし、異年齢集団でその障害の主訴も多様な児童が在籍する学級であるため、時間における自立活動の指導を教育課程上に位置づけることが難しかった(表4)。また、多くの保護者が「子どもに疎外感を味わわせたくない」「通常学級の子と同じ時間割で指導して欲しい」という思いから、交流学級での学習を望み、領域・教科を合わせた指導や領域別の指導に理解を示さないことが多くあった。そこで、個別的教育支援計画を基に、障害からくる学習上及び生活上の生活課題を保護者と確認し、優先順位をつけることで、国語や算数などの時数から自立活動の時間を確保したり、効果的な学習形態(交流学习や個別学習など)を話し合うなど、共通理解を図った。

③ 活用できる個別の指導計画の作成

表 4 教育課程の情報整理表

本学級においても個別の指導計画を作成し指導にあたっているが、現状として④作成後の活用が不十分である、⑤学校で学習したことが家庭や地域など生活で活かすににくい、という課題があった。労力をかけて作成した個別の指導計画が授業に活用しにくいその要因として、実態把握や指導目標が教師主体となっており、児童の実

(3) 指導形態別にみる効果的な指導の検討

① 時間における自立活動（学習形態：個別指導）

本学級では、障害の特性に応じた課題の指導や個のニーズに応じた指導を行うため、時間における自立活動の指導を「チャレンジタイム」と名付けて、週2時間設定している。自立活動の学習形態には、個別学習（教師と1対1）、グループ別学習（発達段階で編成する小集団）があり、学習内容に応じて学習形態を工夫し授業を行っている。図5は個別学習でAさんの好きなお菓子を強化子に「ください」と言葉で伝える練習をした教材である。繰り返し指導する中で、「ください」という言葉がAさんにとつ

て得をすることが分かり、他の場面でも

般化することができるようになった。

個別の指導計画

〇〇〇小学校 年 名前: 担任: (平成 年 月 日)作成

児童名 ()

指導領域	長期目標(学年末)	短期目標(1学期)	手だて	評価
生活				
音楽				
図画工作				
体育				
生活単元学習				
自立活動				
交流学習				
家庭学習				
特記事項				
次年度の引き継ぎ				

① / 印 ② / 印 ③ / 印

保護者や関係機関と確認

できつつあるものから優先順位を決めた。

自立活動の要素を整理した三要素で指導内容を分析・段階的に捉えた。

評価を記入することで、成績表として保護者に渡す。

教科の目標から指導内容を下すだけではなく、生活課題を意識して指導内容を工夫するように個別の教育支援計画から転記した。

いつ、どこで、それが、どのように支援するのか、具体的な指導方法を記す。

多様な要素を盛り込んで指導目標を設定するのではなく、優先順位を決めた生活課題を、いろいろな場面で必然性を持たせて繰り返し指導するようにした。

図3 個別の教育支援計画から繋がる個別の指導計画の様式

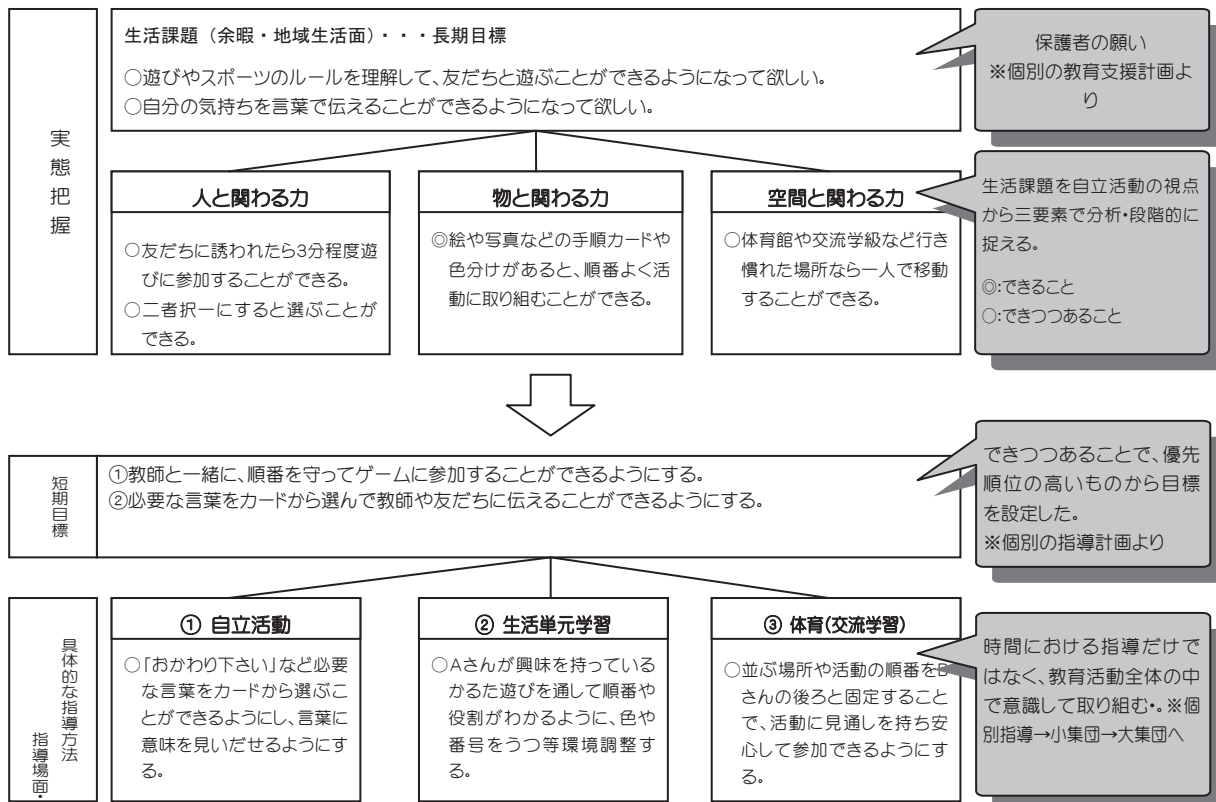


図4 個別の教育支援計画から繋がる個別の指導計画の様式

② 領域・教科を合わせた指導と関連させた指導（学習形態：小集団）

個別学習で身につけたスキルを小集団の中へと対象を広げ、特別支援学級の中で般化できるように授業を設定した。児童が自ら「やってみよう！」と心が動く題材を設定するため、休み時間の様子から観察することにした。すると、図6のように、かるたの絵札を一人楽しそうに眺めている子、読み札を五十音順に並べている子など、思い思いにかかるたで遊ぶ様子が見られたため、かるた遊びを取り上げることとした。



図5 Aさんの「ください」の言葉を促す教材

【観 察】 休み時間の子どもの様子

Aさんの周りにいた児童も興味をもって一緒に遊ぼうとするが、読み手と取り手の役割交代が難しかったり、一人で遊びたいためにかんしゃくをおこしたりなど、毎回トラブルがおこった。

【試 し】 役割交代が見える形で（遊びの構造化）

絵札を入れるケースを赤、読み札を入れるケースを青と保管するケースを色分けした。また、ゲームの時は、取り手のエリアには赤いビニールシートを、読み手のエリアには青いビニールシートを敷くことで、役割を目で見えるように設定した。すると、役割交代がスムーズに行き、トラブルが少しずつ減っていき、子どもたちの笑顔が増えてきた。



【きっかけ】 子どものアイデアから

（毎日、かるたを一人で楽しんでいたAさんとのやりとり）
Aさん：せんせーい、「こ」ください
担 任：「こ」ないの？
Aさん：あ～、さんねん、「こ」ないね
担 任：じゃ、Aさんがつくってみようか。「こ」・・・
Aさん：『こ』まったときは、たすけっこ
→（Aさんが、いつも口に出していることば）



【単元の成立】 オリジナルかるたを作って遊ぼう！

Aさんをきっかけに児童たちも作成に参加。学級のルールや好きなことなど、生活の中から読み札となる題材を見つけた。【例】『あ』りがとう、いえたらきみも天才だ
児童の好きな忍者の修行に見立てて、かるた遊びを始めた。

図6 心が動く活動を設定するまでの流れ

児童が活動に見通しをもち、安心して取り組むことができるように授業の流れを図7のように固定した。Aさんの生活課題と、他の児童も優先課題をたて、目標達成を目指して物理的環境を図8のように調整した。適切に友だちや教師と関わることもできたときは、手裏剣ポイントをあげて、即時強化するようにしたが、Aさんにとって強化子にならなかった。そこで、Aさんの好きな車の写真を6等分し、そのパーツをポイントとすると、

意味を見だし、友だちと自分を比べながら適切な行動や必要な言葉を話ししようとする様子が少しずつ見られるようになってきた。

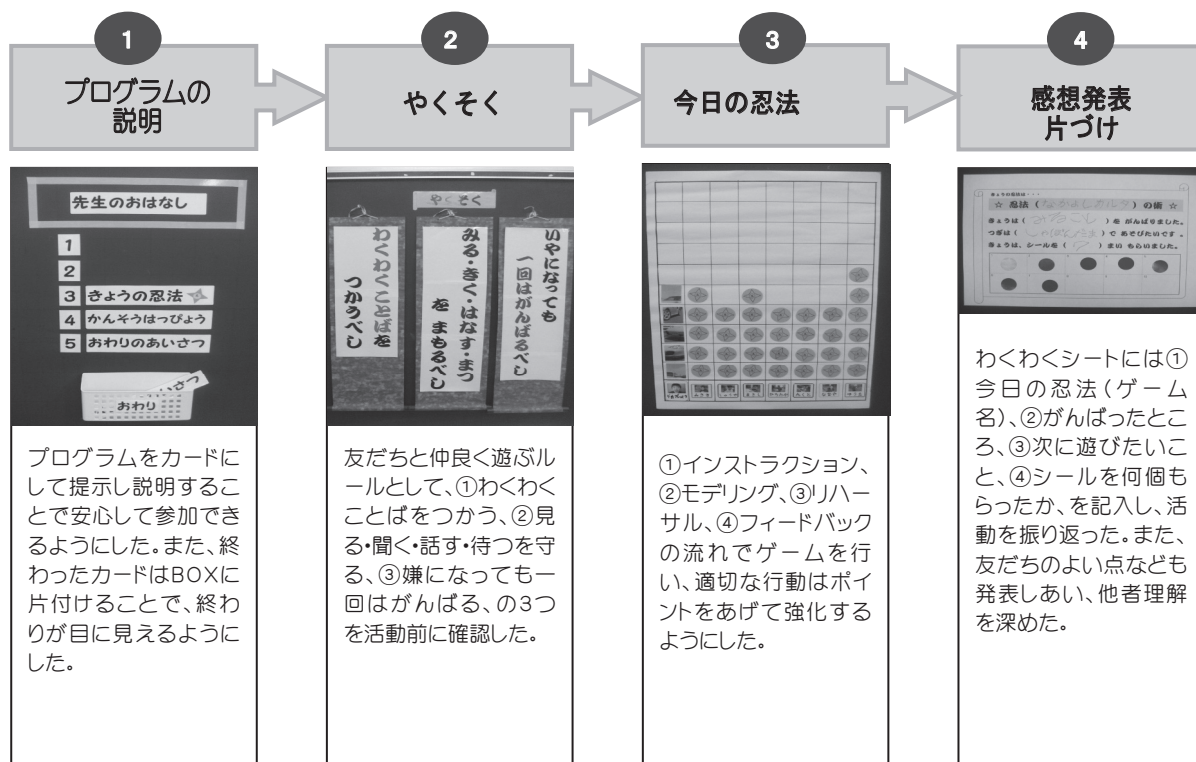


図7 「わくわくタイム」のプログラムの流れ

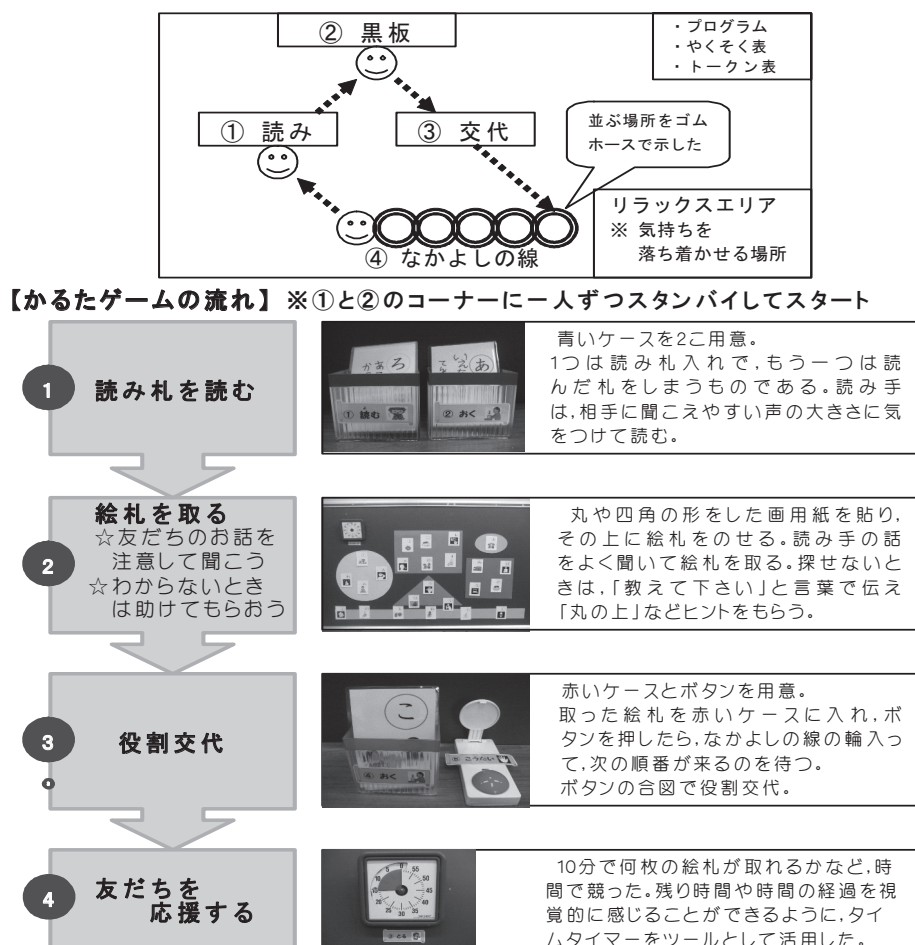


図8 オリジナルかるた遊びの流れ

適切に友だちや教師と関わることができたときは、図9のように手裏剣ポイントをあげて、即時強化するようにしたが、Aさんにとって強化子にならなかった。そこで、Aさんの好きな車の写真を6等分し、そのパーツをポイントとすると、意味を見だし、友だちと自分を比べながら適切な行動や必要な言葉を話しようとする様子が少しずつ見られるようになってきた。

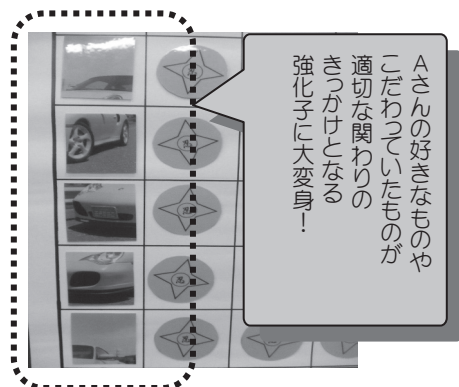


図9 Aさんのポイント

③ 交流及び共同学習における指導（学習形態：交流学級における大集団）

Aさんにとって、交流及び共同学習は経験を広げ、社会性を育む上で、大変有意義である。交流学級担任が主となって指導に当たるため、学期始めには個別の指導計画を基に指導目標を確認するようにしている。また、図10のように、交流ファイルを作成することで、毎日の児童の情報交換を行い、一貫した指導が行えるようにしている。

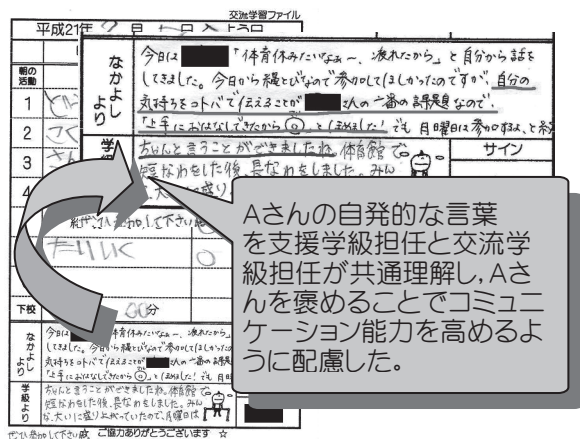


図10 Aさんの交流ファイル

5 成果と課題

自立活動の観点を三要素に整理し、個別の教育支援計画、個別の指導計画に含ませ活用することで、どの教科・領域にも自立活動の視点を取り入れることができ、一人一人の特性に応じた指導と、集団移行へのステップとして関連性を意識した授業の展開を図ることができた。生活課題に優先順位をつけることで、多様な要素を盛り込むのではなく、明確な指導目標が設定されることで、学習の積み上げが可能となった。また、自立活動を始めとし、特別支援学級の指導体制に不安を覚えていた保護者も、実際に個別の教育支援計画の策定から個別の指導計画の作成、実践、評価と関わることで、「子どもの将来が見通せ、今何をすればいいのかわかった」「現在の指導が将来の生活と関連することがわかった、家庭でできることはがんばりたい」という意見が出た。障害のある児童の目標は、自立して社会参加することである。それを支える日々の授業が大きな役割を果たす。個のニーズに応じた指導・支援によって得たスキルを学校のみならず、家庭や地域での生活に広げていくことで生きる力は高まる。一人一人に効果的な学習スタイルを理解し教材教具の工夫や選択に活かす力を指導者が高めるためにも、自立活動の指導の専門性向上が必要である。これからも、一人一人の障害特性への対応と教育的ニーズに対応する指導が整えられることが必要であり、自立・社会参加を目指す目的である自立活動の指導の充実はより一層求められる。教育課程上重要な位置を占めていることを再認識する必要がある。

VI 通常の学級の生徒への障害理解を図るために一道徳の授業をとおしてー

1 問題の所在

平成 19 年 4 月から特別支援教育がスタートし、すべての学校において、特別な支援を必要とする幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた支援をさらに充実していくこととなり、平成 21 年 3 月には障害のある幼児・児童・生徒の教育的支援の充実が規定された特別支援学校新学習指導要領が告示された。

町内には二つの中学校があり、それぞれに知的障害特別支援学級がある。特別支援学級に在籍する生徒の中には、集団の中での意思表示や自己主張等がうまく図れないことから、他の生徒とトラブルをおこしたり、学級の中で存在感が薄くなってしまい、突然の時間割の変更時に取り残されてしまう等の場面がみられていた。

このような状況を解決する手立てとして、個性を見つめるという側面から、道徳の授業を通して通常の学級の生徒らに障害理解を図る取り組みを進めた。指導の経過の中で、時間割変更時に協力学級の生徒からの声かけ等、学校生活の中で気軽に呼びかけ合う場面が多くなり、生徒らの関わる態度に変容が見られた。併せて、特別支援学級に在籍する生徒も閉ざしがちだった教室の窓を開け、周りの生徒が行き来する様子を気にすることもなく、行動する姿が見られるようになった。そのようなことから、これまで特別支援学級担任として関わる中で、本学級に在籍する生徒がよりよい学校生活や学習生活を過ごすには、周りの生徒や職員の特別支援学級やそこに在籍する生徒に対する理解は、大変重要なものと実感してきた。

近年、多くの中学校で通常の学級に在籍しているとされる LD・ADHD・高機能自閉症等の特別な支援を必要とする生徒が様々な場面において困難な状況に見舞われ、特に通常の学級での人間関係の難しさが挙げられ、周囲の生徒の理解を促していく手立てが求められている。

そこで、本研究では、道徳の時間をとおして、障害理解を図ることにより、他者に対して“～したい”“～しようとする気持ち”等の道徳的実践意欲と態度を育てることを大きなねらいとしている。そして、そのために、生徒らが“今までの自分を振り返り、生き方を考える時間”を確保するとともに、これまでおこなってきた障害理解のための授業を各学年ごとに整理し、実践を図ることにより、これまでの成果や課題が確認できるであろうと考える。

2 ねらい

中学校新学習指導要領「道徳編」において、作成と内容の取り扱いについては、下記のような事項が加えられた（※太字は今回新たに加えられた語句）。

①生徒の発達の段階や特性などを踏まえ、指導内容の重点化を図ること。

②悩みや葛藤等の思春期の心の揺れ、人間関係の理解等の課題を積極的に取り上げること。

また、配慮事項としては、先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して、生徒の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。そして、道徳教育を進めるに当たっては、道徳の時間の授業を公開することも加えられている。

これらのことを踏まえ、通常学級における「道徳」の授業を実践し、障害理解を図ることにより、全ての生徒がより良い学校生活を送るきっかけとなることをねらいとした。

3 研究の仮説

本研究のねらいを達成するために、以下の仮説を設定した。

(1) 本校を含む地区内の中学校を対象に、障害児理解についての授業の実施状況を把握することで、学校が抱える障害理解の取り組みの必要性和具体的な手立てを探ることができるであろう。

(2) 各学年の発達段階に応じた障害理解につ

いての指導内容の構成や方法を考え、道徳の授業をとおして、障害の有無に関わらず、お互いを認め合い、協力して学校生活が送れるようになることであろう。

4 内容と方法

(1) 沖縄県中頭地区内の中学校における、障害児理解のための授業実施状況について調査し、障害理解についての授業の必要性について把握し、具体的な手立てについて検証する。

(2) 新学習指導要領に沿って指導計画を立て、生徒の実態に応じた内容や方法の工夫を図り、授業の取り組みについて検証する。

(3) 本校を含む2つの中学校において、生徒の実態に応じた内容や方法の工夫を図り、実際の授業の展開をとおして、生徒の変容について検証する。

5 検証

(1) 仮説1の検証

沖縄県中頭地区中学校における、障害児理解のための授業実施状況（図11～13）

本地区には、39校の中学校があり、そのうち30校に38学級の知的障害学級及び情緒障害学級がある。

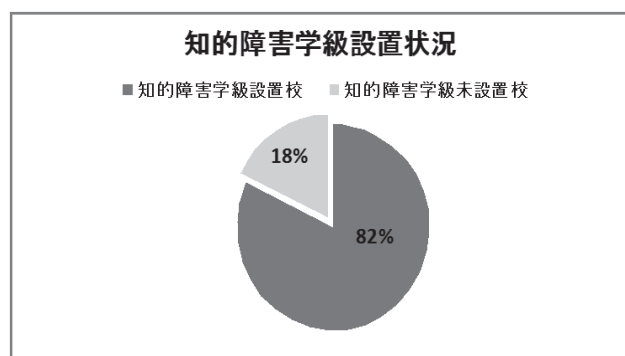


図11 知的障害特別支援学級設置状況

特別支援学級が設置されていることに限らず、西原中学校と西原東中学校を除いた本地区の全中学校の特別支援学級担任にアンケートを実施したところ、回収率は29校で74%であった。

まず、「通常学級に在籍する生徒に対して、

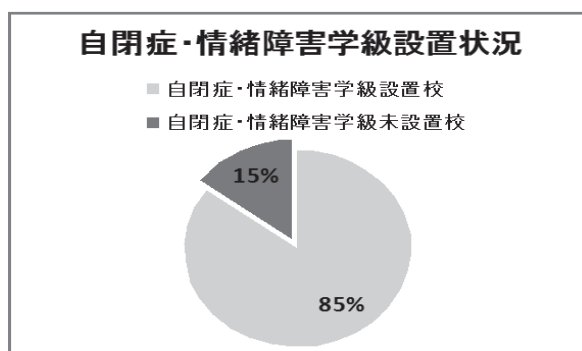


図12 自閉症・情緒障害特別支援学級設置状況

障害児理解のための授業等は必要と思いますか？」の問いに対し、全校「はい」と答えている。その理由の多くは「理解が不十分であることがトラブルの要因となっている」、「他者を思いやる心を育むため」という回答であった。そして、「貴校では、障害児理解のための授業が実施されていますか？」の問いに対して、「はい」と答えたのは3校で10%であり、残り26校90%の学校では必要性を感じつつも、実施されていない現状であることを確認した。（図13）

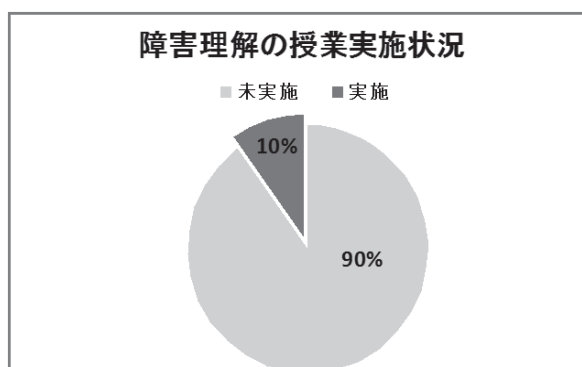


図13 障害理解の授業実施状況

また、上記の実施している3校においては、授業担当者についての問いに、「通常の学級担任」「特別支援学級担任」「特別支援教育コーディネーター」「保健体育教諭」の回答があり、実施している時間についての問いには、「道徳」「学級活動」「保健体育」であった。そして、内容についての問いには、「知的及び発達障害」「自閉症（高機能自閉症含む）」「てんかん」「いじめ」という回答であった。

実施している学校は3校ではあるが、全ての学校で以下のように生徒の変容が確認されている。

・皆が理解し、何かあったときに対応がスムーズにできた。

・周りの生徒がサポートしようとする姿が見られるようになった。

・お互いの良さを見つけ、足りない部分を補い合うことが大切だという意識が芽生え、学校生活全般、行事等で和やかな雰囲気ができている。

以上のような回答や、アンケート結果から、障害理解のための授業の必要性が伺える。

(2) 仮説2の検証

仮説2を検証するために、道徳の授業をとおして、各学年の発達段階に応じた障害理解についての指導内容の構成や方法を考え、障害の有無に関わらず、お互いを認め合い、協力して学校生活を送れるようになることをねらいとした以下の授業の展開を図った。

①1学年における実践

道徳「個性について Part 1」をとおして、自他の違いに気づき、協力して学校生活を送ろうとする気持ちを高めることをねらいとして、パワーポイント教材を作成し（巻末資料4参照）授業の展開を図った。

指導案は、巻末資料5を参照

授業後は、ワークシート（巻末資料6参照）

を活用して、生徒に授業の振り返りを図った。

〈生徒の感想〉

・人はそれぞれ違う「個性」をもっていることが分かりました。先生の例えの“みんなが同じだったら…”気持ち悪く感じました。だから、「個性」というのが凄いなと思いました。自分や人の個性があるみたいに、障害をもっている人も、同じような事なの分かりました。なので、障害がある人に差別しないでお願いします。いろいろな人と普通に接したいです。

・「人はみんな違うから楽しいのに、それを元としてからかったりするのはおかしいことだな」と思いました。皆が同じ顔、同じ性格だととてもつまらないのに、人と違う時は誰かをバカにするような見方をするなんて、絶対にあってはならないことだと思いました。私は、今日の授業を受けて

「誰かを偏見したり、仲間はづれにするようなことはしたくないな」と思いました。これからも、色々な人たちと仲良くできるようにしたいと思います。

・利き手と反対の手でいろんな作業をして、一人でやるより二人でやった方がとっても楽でした。それで、協力し合ってやったほうがいいなあと思いました。また、目を閉じて名前を書いたりして、汚くなったり、歪んだりして大変でした。今日の授業を受けて、障害をもった人たちの大変さが分かりました。

・今日の授業を受けて、障害者の気持ちがとても分かりました。うまくやりたいのにできないことや、気持ちはあるんだけど、うまくできないことを知りました。とてもいい授業でした。

②2学年における実践

道徳の主題名「温かい人間愛（内容項目：2-(2)）」をとおして、障害者に対する理解や見た目にはわかりづらい苦手さがあることを理解しようとする心を育てることをねらいとして授業の展開を図った。（巻末資料7参照）

〈生徒の感想〉

・発達障害などの障害があっても、すごい可能性がある人はたくさんいるということが分かり、すごいと思った。

・周りの人の心づかいで障害の人も少し楽になることが分かった。

・「障害」というのは、目で見て分かるのと分からないのがあるから、その人のことをちゃんと理解してあげることが大切だということが分かりました。

・私が手助けをすることによって、相手が少しでも助かると思うなら、力になってあげたいと感じさせられました。

・たまに「障害のある」人を見ると、笑ったり、「あの人足が変だよね」とか言ってしまったりしたことがありました。その時は、その人の気持ちも知ろうとしないで、おもしろいからだったけど、今日の授業を聞いて、そんなことはもうやめようと思いました。

<生徒の感想からの考察>

- ・障害があることに対して、プラスのイメージをもつことができた。
- ・理解することや助け合うことの大切さに気づくことができた。
- ・これまでの行いを振り返ることができた。

③3学年における実践

道徳の主題名「それぞれの個性（内容項目：2-(5)」をとおして、自分の力だけでなく、周りの人の理解や温かい声かけにより苦手さを克服していけることがわかり、自分も級友に温かい声かけをしようとする態度を養うことをねらいとして授業の展開を図った。

<生徒の感想>

- ・私のいところに知的障害の子がいて、・・・私は、どう対応したらよいか分かりませんでした。でも、今日の授業を通して、こういう障害者には、どういう事をしてあげれば良いかなどが、よく分かった。次、いところに会ったら、たくさんほめてあげようと思いました。
- ・障害は少し人とちがうところがあるだけで、それも個性なんだなあと思いました。聞く前は、障害者は障害者って、思ってたけど、今はみんなと同じなんだと思いました。
- ・今日の授業で、コミュニケーションは大事ということがわかりました。
- ・人に対しての言葉のかけ合いが1番よく分かりました。相手が嫌がることを言うのではなく、どんなことを言ったらその人は良い気持ちになっできるのか、などということも知りました。

<生徒の感想からの考察>

- ・実際にやってみようという気持ちをもつことができた。
- ・障害があってもなくても「同じ」なんだと気づくことができた。
- ・声をかけてあげることの大切さに気づくことができた。
- ・一人一人ちがう個性をもっていることの理解ができた。

3 成果と課題

(1) 成果

授業で活用したワークシートを分析してみると、グラフのような結果が分かった。(図 14)

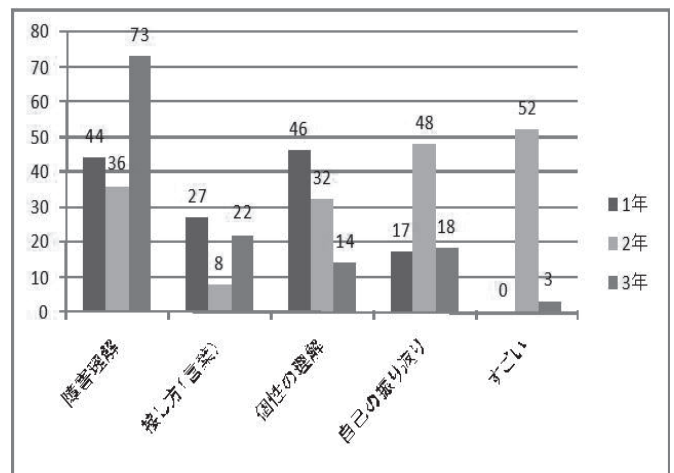


図 14 ワークシートの分析

まず、1年生においては「個性の理解」45%、「障害理解」44%、「接し方（言葉）」27%の順になっている。特に「障害という言葉の使い方に気をつけたい」という意見が目立った。また、2年生においては「すごい（トム・クルーズさんやマッケンジー・ソープさん）」52%、「自己の振り返り」48%、「障害理解」36%の順となった。そして、3年生においては「障害理解」73%、これは、とくに発達障害についてという意見が多かった。そして、接し方 22%、「自己の振り返り」18%であった。この結果から、1年生は「個性の理解」、2年生は「自己の振り返り」、3年生は「障害理解」という、それぞれの発達段階に応じた受け入れができたのではないかと考える。特に、3学年においては、障害理解に関する 10 項目の確認問題を実施した際、どの学級も正解率が 90%以上という高数値であったことは、授業を行ったことで、発達障害理解が図られたといえるのではないだろうか。また、生徒のふざけが高じて問題が起こった際、道徳の授業で実施したことを振り返らせることによって、円滑に問題解決ができたこともあった。

(2) 課題

- ・教師主導型の授業になりやすいので、生徒

が活動する場面を多くする工夫が必要である。

- ・3学年の授業においては、機器操作の都合上、教師がその場から離れられない状態であるが、記述活動等で助言を求める生徒に対応するために、机間巡視ができるよう工夫する必要がある。

- ・新しく授業を導入する際、各学年の発達段階に応じて、系統立てて内容を組み立てる必要がある。

6 考察

各学年に合った障害理解についての授業を通して、障害の有無に関わらず、お互いを認め合うことができ、3年生においては、これまで知らなかったLD・ADHD・高機能自閉症等について、知識として学習することができた。そして、どの学校でも、創意工夫し、障害理解のための授業を実施することで、周りの生徒が支援の必要な生徒を理解し、認めることが可能であることが分かった。

7 まとめ

今回、通常学級の生徒への障害理解を図るための研究を進めていく中で分かったことは、どの学校においても、授業の必要性を感じるものの、それを実施する教師が少なく、また、生徒の発達段階に応じた内容で、指導に適する教材が少ないということである。しかし、授業を実施している学校においては、先述したアンケート結果からも分かるように、生徒の変容を確認できている。そのことから、身近に適した教材があれば、教師は創意工夫しながら授業を展開させることができることを実感した。

また、生徒から「先生、〇〇さんって先生を見つけた時、とてもいい表情をしますね!」と声をかけられたことがある。それは、些細な一言であるが、その言葉の背景には、本学級の生徒のふとした表情等をしっかり見つめている生徒がいるということが確認できた瞬間であった。障害を理

解し認めること、それは日々の生活の中にしっかり表れてくると思う。

VII 研究のまとめと今後の課題

本研究では、特別支援学級が魅力ある学級経営を図っていくための具体的な方策を検討することを念頭に、以下の5つの課題を挙げた。

- ①教育課程を大切に作る時間割作成の工夫と関係者との連携
- ②障害のある児童の特性に応じた効果的な教科学習の在り方
- ③豊かなつながりを作る「交流及び共同学習」の教育課程の編成と具体的な支援の工夫
- ④自立活動の観点を基にした個別の指導計画の活用と授業の工夫
- ⑤通常の学級の生徒への障害理解

①については、子どもが生き生きと活動できる学級作りのために教育課程を大切に作る時間割作成のために、特別支援学級が児童生徒の実態を把握し、学級づくりのための時間割をあらかじめ作成し、それを基に校内の交流及び共同学習を図る学級担当者や校内関係者と密に連携を図ることで、円滑な学級経営や授業を展開することが大切であることが検証された。

今後は、校内の協働体制の確立と併せて協議や話し合いの場と時間のどのように確保し、毎年の取り組みとして定着させていくかが課題として残されている。

②については、今回の事例では、特別支援学級どうしの共同による算数の授業を展開した実践であった。児童の障害特性に応じた効果的な教科学習を図るために、児童の興味・関心をもつものに視点を合わせ活動的な学習展開を図っている。小集団による力動的な授業展開が児童の動機づけを図り、次の意欲へとつながっていった事例である。

今後も知的障害特別支援学級の児童に対する効果的な教科教育を展開する上で、知的障害の特徴及び学習上の特性を踏まえ、児童が自立し社会参加するために必要な知識や技能、態度などを身につける学習の保障が求められている。特別支援学校学習指導要領の各教科等の実践も参照しながら、児童の個々のニーズに応じた教科学習を展開していくことが求められている。

③については、特別支援学級担当者と通常の学級担任との密な情報の共有と相互の理解が構築され、子どもたち個々の相手を受け入れる展開を図ることができた。

しかし、今後の課題として、今回の研究をとおして気づかされたが、子ども同士の豊かなつながりを築いていくためにも、学校の教育活動全体を通じて、計画的、組織的に行うことが強く求められている。

④については、特別支援学級における「自立活動」を教育課程の中にどのように取り込み、異年齢集団で個々の能力差が大きい状況にあっても、どのように個別の指導の時間を確保すれば良いのか、その具体的な実践をまとめることができた。

今後、児童生徒の実態を考慮して、自立活動の指導を具体的に教育課程上に位置づけ、内容を具体化し、個別の指導計画を基に児童の教育的ニーズに応える取り組みが強く望まれている。

⑤については、中学校を事例として取り組みを進めてきた。通常の学級の生徒への障害理解を広げるための具体的な指導展開を図り、多くの生徒の理解を得ることができた。

今後、展開する障害理解のための授業展開において、年齢段階を考慮し、継続的に実践していくことが求められる。

日々の学校生活の中で、あたりまえのこととして、児童生徒相互に相手を思いやり、相互の違いを認め合い、相互に助け合っていく

土壌を学校内に構築していくことが望まれる。そのためにも、全職員が共通認識し、あらゆる学校活動の中で、児童生徒へ適切な指導を図っていくことが今後の課題として残される。

以上のように、今回の研究を取り進む中で、特別支援学級が魅力ある学級経営を図っていくための抱える課題を解決するために実践を深めてきた。まだまだ課題は多く残されているが、今回の実践研究が児童生徒が生き生きと学校生活を送ることができるための魅力ある学級づくりをめざす上での一助になれば幸いである。

おわりに

この研究の機会を与えてくださった、財団法人みずほ教育福祉財団並びに財団法人障害児教育財団に深く感謝申し上げます。

引用参考文献

- ・文部科学省：『中学校学習指導要領解説 道徳編』 2008
- ・大杉昭英：『中学校新学習指導要領の展開 総則編』 明治図書 2008
- ・細川佳代子：『特別支援教育をすすめる本 4 知ってる？発達障害 ワークブックで考えよう』 ミネルヴァ書房 2009
- ・文部科学省：『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）』 2008
- ・大南英明編 『特別指導教育の展開 2 交流及び共同学習への取り組み』 明治図書 2009
- ・大南英明編 『小学校新学習指導要領の展開 特別支援教育編 附幼稚園教育』 明治図書 2009

【資料1】

〇〇〇学級時間割表

	曜日	月	火	水	木	金
	朝活	読書タイム	全体朝会	読み聞かせ	読書タイム	読み聞かせ
	児童名	サーキット・リズム	児童集会	カード遊び	サーキット・リズム	
1校時	1年A	日常生活の指導	国語	すみれ音楽 (専科担当) 歌・リズム・楽器遊び、リトミック	図画・工作	生活単元学習
	2年BC		体育		本学級での音楽(音楽専科が担当)特別支援コーディネーターのため支援員等とのミーティング時間	学習
	3年D		国語			学習
	4年E		国語			理科
	5年F		国語			学習
	6年G		国語			理科
2校時	1年A	生活単元学習	生活単元学習	体育	図画・工作	生活単元学習
	2年BC			体育	図画・工作	生活単元学習
	3年D			図工・☆社会	生活単元学習・☆社会	生活単元学習
	4年E			国語・☆	1・2校時:生活単元学習(連続の時間確保)	生活単元学習
	5年F			国語・☆		生活単元学習
	6年G			国語	図画・工作	生活単元学習・☆理科
3校時	1年A	体育	算数	生活単元学習・算数	体育	音楽
	2年BC	算数	算数	生活単元学習	工作	生活
	3年D	☆総合的な学習	体育	生活単元学習・算数	図画・工作	体育
	4年E	算数	生活単元学習・☆理科	生活単元学習・算数	図画・工作	算数
	5年F	体育	算数	生活単元学習・算数	図画・工作	算数
	6年G	国語・☆音楽	算数	生活単元学習・算数	外国語活動	音楽
4校時	1年A	生活	国語	生活	算数	国語
	2年BC	生活	国語	国語	算数	音楽
	3年D	算数	家庭科:実習等内容によっては、交流学習	国語	算数	☆総合的な学習
	4年E	生活単元学習・☆社会	国語	国語	体育	☆総合的な学習
	5年F	算数	体育	生活単元学習・☆家庭	外国語活動	音楽
	6年G	算数	少人数での学習	生活単元学習・☆家庭	算数	国語
5校時	1年A		工作	音楽	国語	学活
	2年BC	生活単元学習・☆学活	音楽	生活	国語	体育
	3年D	生活単元学習	体育:中・高学年で組めた。	体育	低学年:交流学習時間割を要望	指導
	4年E	生活単元学習		国語		指導
	5年F	自立活動	生活単元学習	国語	体育	☆学活・日常生活の指導
	6年G	自立活動	生活単元学習・理科	体育	国語	☆学活・日常生活の指導
6校時	1年A					
	2年BC					
	3年D		算数		学級活動は、必要に応じて交流学習、高学年:上靴やタオル・エプロンの洗濯、トイレ掃除等	
	4年E		音楽	体育・クラブ		
	5年F		総合的な学習	学活・クラブ		
	6年G		総合的な学習	総合・クラブ	体育	

【資料 2 - 1】

1 すみれ学級年間指導計画一覧表（1 学期）

月		4 月	5 月	6 月	7 月
学校行事		・始業式、新任式 ・入学式 ・1 年生を迎える会 ・健康診断等諸検査 ・交通安全教室	・春の遠足 ・家庭訪問 ・避難訓練 ・プール開き	・親子 P T A 作業 ・歯の衛生週間 ・食育集会、月間 ・平和集会	・個別面談 ・七夕集会 ・終業式 ・夏休み
交流及び合同学習		なかよし探検隊（1・2 学年） ・すみれ開級式	校区探検①～④6 月まで（3 学年）	☆ミニオリンピック（村特別支援学級合同学習）	・居住地交流
領域・教科を合わせた指導	生活単元習	・進級おめでとう ・新しい仲間 ・自己紹介 ・みんなで遊ぼう ・学校探検	・春の遠足 ・先生、よろしく ・家族（大好きな家族） ・草花を育てよう	・ミニオリンピックがんばるぞ！ ・友だち作ろう ・校内ウォークラリー（探検発見大冒険）	・水遊び ・校外学習（郵便局へ行こう・セミ取り） ・野菜パーティー ・夏休みのくらし
		○栽培、観察、収穫、販売、調理等の体験活動や絵日記、ワークシート等で発表・表現活動を行う。 ○買い物学習、校内・校区巡り、公共施設の利用を体験させる。 ○カレンダーづくりや季節の行事の紹介をする。			
	日常生活の指導	←あいさつ、カレンダーワーク、天気調べ、日課表、係りの仕事、朝の会、身だしなみ、身のまわりの整理整頓、排泄（トイレの使い方）、給食（準備・食事のマナー・片付け）、歯磨き、清掃、がんばりカード、健康観察、歌☆食べ物の名前・牛乳についてしろう→読み聞かせ・リズム遊び・ゲーム・ボールあそび→			
	特別活動（※諸）	・学校の 1 日 ・トイレの使い方 ・道具の置き場所 ・学校の行き帰り	・楽しい給食 ・じょうぶな体 ・雨の日（雨具の使い方）、安全な遊び	・じょうぶな歯 ・ハンカチを持とう ・持ち物の整理 ・正しい箸の持ち方	・身なり ・夏休みの過ごし方 ・自分でできること
教科別の指導	国語	新しい友だち ・あいさつ自己紹介 ・身のまわりのもの ・身体各部の名称	どうぶつのくらし 春のえんそく ・絵を見て話す ・作文 わたしのかぞく	むし歯の予防 絵本を読もう 友だちつくろう 絵日記	七夕まつり ・絵本、紙芝居 暑中見舞い ・はがきの書き方
	算数	なかまあつめをしよう ・弁別 ・集団づくり 学校の一日 ・一日の生活	くばりましょう ・くばりましょう ボーリングあそび ・相等、多少 ならべよう ・位置、場所	学校の一日 ・一日の生活 ・日課表 時計と時刻 ・いま何時 ・時計を調べよう	かぞえましょう ・順序数 ・数の大小 ・くだもの木 ・カードあそび ・カードならべ
	図工	・自分の顔 ・こいのぼり	・お母さんありがとう わくわくどうぶつえん	・色水遊び、きれいなよう ・うかぶおもちゃ	・砂遊び
		理科・社会・家庭・音楽・図画工作・体育・生活科（協力学級の計画に準ずる）※障害の状態や特性、経験等に配慮して具体的指導内容を設定する。内容の精選や補助教材等の活用			
領域別の指導	道徳	明るく挨拶・みんなのもの・うんこの話……・ふわふわチクチク言葉・自分でできるよ……領域・教科をあわせた指導を中心に学校教育活動全体を通して指導を進める。			
	自立活動	○個別の指導計画のもと各教科等の指導との関連を図って進める。			
		総合的な学習、英語活動（通常学級の計画に準ずる）、個別の指導計画参照			

【資料 2 - 2】

1 すみれ学級年間指導計画一覧表（2 学期）

月		9 月	1 0 月	1 1 月	1 2 月
学 校 行 事		・ 始業式 ・ 発育測定 ・ 夏休み作品展 ・ 運動会	・ 読書月間 ・ 校内童話お話会 ・ 校内音楽発表会 ・ 宿泊学習（5 学年）	・ 読谷村まつり ・ 社会見学 ・ 修学旅行 ・ 火災避難訓練	・ 学級懇談会 ・ 演劇鑑賞会 ・ 終業式
交 流 及 び 合 同 学 習		・ 運動会 ・ 地域老人会交流会 （1・2 学年）	☆カレーパーティー （村特別支援学級合 同学習）	・ 居住地交流	☆暮れの町見学（村 特別支援学級合同学 習）
領 域 ・ 教 科 を 含 め た 指 導	生 活 単 元 学 習	・ 2 学期がんばるぞ ・ 敬老の日 ・ 楽しい運動会	・ おいしいカレーをつ くろう（買い物学習） ・ 楽しい読書 私たちのまち （・ 宿泊学習へいこう）	・ 収穫祭（ジーマー ミ豆腐づくり） ・ はたらく人々 ・ すみれ発表会をし よう （・ 修学旅行へいこう）	・ 暮れの町へでかけ よう ・ クリスマス会をし よう ・ もうすぐ冬休み
		○栽培、観察、収穫、販売、調理等の体験活動や絵日記、ワークシート等で発表・ 表現活動を行う。 ○買い物学習、飼育小屋（えさやり）、公共施設の利用を体験させる。 ○カレンダーづくりや季節の行事の紹介をする。			
	日 常 生 活 の 指 導	←あいさつ、カレンダーワーク、天気調べ、日課表、係りの仕事、朝の会、身だしなみ、 身のまわりの整理整頓、排泄（トイレの使い方）、給食（準備・食事のマナー・片付け）、 歯磨き、清掃、がんばりカード、健康観察、今月の歌☆いろいろな食べ物を食べよう（食 べ物の働き）、朝ごはん食べたかな（朝ごはんの働き）→ ← 読み聞かせ、ラジオ体操・かけっこ・跳び箱遊び ・ 固定ゆうぐ遊ぼう →			
	特 別 活 動 （※食育）	・ 清潔な体、汗の処理 ・ チャイムの合図 ・ 配膳の仕方片付け	・ 目を大切に ・ みんなで使う物 ・ 食事の作法	・ あいさつ ・ ひなんの仕方 ・ なかよく遊ぼう	・ 体の清潔 ・ 手伝い、おおそう じ ・ 冬休みの過ごし方
教 科 別 の 指 導	国 語	夏休みの思いで ・ 話す、絵日記 短い文 ・ 1 日の出来事を焦点をしぼってかく。	えほんだいすき ・ 童話やお話を読む。 ・ どくしょにつき （宿泊学習のしおり）	ことば遊び（音読発 表） げきあそび 電話の応対 （修学旅行のしおり）	のりもの ねんがじょう ・ 住所、氏名 ・ あいさつ文
		○ 音読、ひらがな、カタカナ、漢字の読み、書き、メモ日記は年間を通じて 児童の実態に応じて学習する。			
	算 数	ならびっこ ・ 方向、位置 どっちが多い あわせていくつ いくつといくつ	大きい数 ・ 大きいかず ・ たしざん いろいろな形 ・ なかまあつめ	いろいろな量 ・ かさくらべ ・ 長さくらべ ・ 広さくらべ ・ 重さくらべ	お金 ・ お金あてゲーム ・ おみせやさん ・ かいものへ行こう ・ 電卓の使い方
	図 工	・ 楽しかった夏休み ・ すいぞくかん	・ つるす飾り ・ 折り紙、	くだもの・やさい へんしんマン	・ のりもの ・ クリスマス作品
		理科・社会・家庭・音楽・図画工作・体育・生活科（協力学級の計画に準ずる）※障害の状態 や特性、経験等に配慮して具体的指導内容を設定する。内容の精選や補助教材等の活用			
領 域 別 の 指 導	道 徳	・ 最後まで・けんか・空からのプレゼント・いただきます・お祭り行ったよ・おつかいマシ 領域・教科をあわせた指導を中心に学校教育活動全体を通して指導を進める。			
	自 立 活 動	○個別の指導計画のもと各教科等の指導との関連を図って進める。			
		総合的な学習、英語活動（通常学級の計画に準ずる）、個別の指導計画			

【資料 2 - 3】

1 すみれ学級年間指導計画一覧表（3 学期）

月		1月	2月	3月
学校行事		・始業式 ・発育測定 ・新春書き初め会 ・学芸会	・児童会役員選出	・6年生を送る会 ・卒業式 ・修了式、離任式 ・春休み
交流 及び 合同学習		・幼稚園との交流会(3学年) ・学芸会	・みんなあつまれ、わくわくら ンド(2・1学年) ☆お別れ遠足(村合同学習)	・6年生を送る会
領域・教科 を 合 わ せ た 指 導	生活単元学習	・3学期がんばろう(新しい年・ カレンダー) ・学芸会	・寒さに負けない子 ・お招き会をしよう(カレー作 り、ミニ発表会) ・お別れ遠足	・1年間を振り返ろう ・もうすぐ〇年生
		○栽培、観察、収穫、販売、調理等の一連の活動をする。 ○買い物学習、社会見学、郵便局の利用、公共施設の利用を体験させる。 ○カレンダーづくりや季節の行事の紹介をする。		
	日常生活の指導	←あいさつ、カレンダーワーク、天気調べ、日課表、係りの仕事、朝の会、身だしなみ、身のまわりの整理整頓、排泄(トイレの使い方)、給食(準備・食事のマナー・片付け)、歯磨き、清掃、がんばりカード、健康観察、今月の歌 ☆好き嫌いをなくそう ← 持 久 走・な わ と び・鉄 棒 遊 び →		
			・かぜの予防 ・冬のあそび	・係のしごと ・何でも食べよう
	特別活動 (※食育)	・郷土の食べ物に親しもう ・沖縄料理のいろいろ	・好き嫌いしないで食べよう	・給食について反省をしよう
教科 別 の 指 導	国語	冬休みの思い出 ・作文、発表 書き初め かるたとり・かるたづくり ○音読、ひらがな、カタカナ、漢字の読み、書き、メモ日記は年間を通じて児童の実態に応じて学習する。	読書ノートまとめ できるようになったこと はんたいのことば	1年間の思い出 文集・作品つづり
	算数	のこりの数 ・ひきざん 重さくらべ ・重い、かるい ・重さの基礎概念 ・単位グラム	数を数えよう(大きな数) ・順序数 ・数の大小 分けてみよう ・ひき算	春休みの日課表 ・時刻、時間のおさらい まとめをしよう ・もうすぐ進級
	図工	・福笑い ・版画 ・風作り	・お面づくり ・ひなかざり	・作品集づくり ・おくりもの
	理科・社会・家庭・音楽・図画工作・体育・生活科(協力学級の計画に準ずる) ※障害の状態や特性、経験等に配慮して具体的指導内容を設定する。内容の精選や補助教材等の活用			
領域別の指導	道徳	悲しそうな目・まってるね、僕私の自慢大会、すてきだね・ありがとう... 領域・教科をあわせた指導を中心に学校教育活動全体を通して指導を進める。		
	自立活動	○個別の指導計画のもと各教科等の指導との関連を図って進める。 自立活動の時間(名)		
	総合的な学習、英語活動(通常学級の計画に準ずる)、個別の指導計画			

【資料 3】

第 4 学年国語科学習指導案

1 単元名 にた意味の言葉

2 単元目標

にた意味の言葉に関心を持ち、その違いを理解して、適切に使うことができる。

3 単元について

(1) 教材観

この年代の子どもは、小学校に入学して以来、様々な事象とのかかわり合いを通して、身近な物事などを表す語句を獲得してきている。日常では、しゃれなどの言葉遊びにふれ、同音異義語や多義語など、言葉への関心が高まってきている。また、国語辞典を利用して学習することにも慣れてきており、類義語の学習への素地はできてきているので、関心・意欲をもって取り組めるはずである。

だが一方で、類義語を適切に使い分けられない子どもも少なくない。類義語について、その違いを考えたり、調べたりする中で、理解を深めるとともに、言葉への興味・関心を高めていきたい。

また、特別支援学級児にとっても言語事項に関する単元においては、動作化をさせたり、グループや隣同士で話し合うことでことばに対するイメージを持ち、自分の意見や考えを交換できるのではないかと考える。

(2) 児童観

B児は、漢字力があるものの通常学級で落ち着いて学習するのが苦手であり、学習に対しても自分ではできないという苦手意識も持っている。そんな中で言語事項に関する学習では、本児に動作化をさせることでイメージを持たせ、となりの子やグループでの小集団で話し合いを持つことで自信を持ち、自分の意見や考えを話すことができるのではないかと考える。

(3) 指導観

この教材では、前半部分で「にぎる」「つかむ」という言葉を取り上げ、類義語の学習の導入としている。後半部分では、そのほかの動詞を取り上げ、類義語についての理解を深められるようになっている。この前・後半を通して、様々な類義語を理解し、適切に使うことができる言葉の力をはぐくんでいくとともに、言葉への興味・関心を高めていきたい。そのためには、学習活動も工夫し、調べたことをクイズやゲーム・動作化などを取り入れながら、進めていきたい。

4 単元の評価規準

	通常の学級児童 ○	B児 ☆
関心・意欲・態度	似た意味の言葉があることに興味を持ちいろいろな言葉を調べようとしている。	にた意味の言葉があることに興味を持つことができる。
話す・聞く	調べた言葉を使い、クイズ形式で発表することができる。	にた意味の言葉を調べ、発表することができる。
言語事項	言葉の意味の違いに気づくことができる。	言葉の意味の違いに気づくことができる。

5 指導計画

時間	学習内容・活動	指導上の留意点・個への手立て	評価規準・方法
1	「にぎる」と「つかむ」の表す意味の違いについて考える。	○言葉の使い方には文脈の中で考えないといけないときもあることを確認する。 ☆その都度、動作化させたり、言葉を使う場面を想像させる。	○似た意味の言葉があることに興味を持ち、意味の違いを調べようとしている。 (ノート・観察) ☆授業に参加し、にた意味の言葉に興味を持つことができる。
2	グループや個人で似た意味の言葉を集め、クイズをする。	○探せない子には、類義語を教師が提示し、その中から選べるようにしておく。 ☆国語辞典を使い、一緒に調べる。	○「似た意味の言葉」を使い分ける文を作っている。 (ノート・発表) ☆にた意味の言葉について調べることができる。

6 本時の指導（１／２）

(1) 本時の目標

にた意味の言葉について知り、言葉についての興味・関心をもつようにする。

(2) 授業仮説

展開の場面において、提示された言葉について動作化を取り入れることによって、より意味や使い方の違いの理解が深まるだろう。

学習中に絵カードを提示したり、適切な言葉かけをすることで学習に参加し、できる喜びを味わい学習のルールを少しずつ身につけることができるであろう。

(3) 本時の展開

☆：B児 ○：通常の学級児童

	学習活動（学習内容）	指導上の留意点（個への支援）	評価・資料
導入	1 音読「春のうた」 2 めあてが何か考える。 3 めあての確認をする。	T 1：全体の音読の様子を把握する T 2：気になる子への配慮 「にぎる」と「つかむ」について、教師の動きに合う言葉を子どもから引き出し、めあてにつなげる。 T 2：絵カードでその場にふさわしい態度を促す	○☆みんなと声をそろえて音読することができる ☆教師を見て、聞くことができる ○めあてについて考えることができる
	「にぎる」と「つかむ」のちがいについて考えよう。		
展開	4 「にぎる」「つかむ」という言葉について、これまでの経験したことや聞いたことを出し合う。 5 「手をにぎる」「手をつかむ」の違いについて考える。 ・実際にやってみて自分の感じたことをノートに記入する。 6 それぞれの意味について発表する。 7 初めに出した「経験したこと」や「聞いたこと」の言葉から、違いについて振り返る。 8 「にぎる」「つかむ」それぞれが使われているほかの例文から、ゲームをする。	・正しいかどうかではなく、いろいろな意見を書き出す。 T 2：☆いろんな場面を思い出させる ・隣り席の子ども同士で、「手をにぎる」「手をつかむ」ことを行い、動作の違いに着目させる。（動作化） T 2：☆児に動作化をさせる。「上手だった」とほめる。 ノートを書いていねいに書くよう言葉かけをする。書けたらほめる。 T 2：絵カード T 2と一生に☆動作化も取り入れながら、使い方の違いに気づかせる。 T 2：☆興奮しすぎて周りの子を叩きそうな時は、間に入りタリにかえる	☆みんなの意見を静かに聞いたり、自分の経験を話すことができる ☆興奮せずに動作化ができる ☆ノートにていねいな字で書くことができる 他の例文のカード ☆みんなと一緒にゲームを楽しむことができる
まとめ	9 次時の予告	・他にもどんな似た意味の言葉があるかについて次の時間に学習することを伝え、考えておくように伝える。	類義語辞典 ☆静かに先生の話の聞くことができる

(4) 評価

B児：☆授業に参加し、にた意味の言葉に興味を持つことができる。

通常の学級児童：○似た意味の言葉があることに興味をもち、意味の違いを調べようとしている。

（ノート・観察）

【資料4】 障害理解のパワーポイント教材

個性って何だろう？

個性とは…
その人・物だけにそなわった特有の性格・性質

特有（その人だけが特にもっているようす）

1

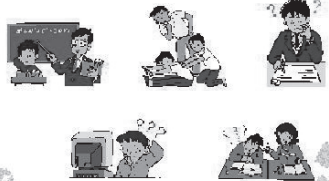
クラスの仲間は？

◆ 1クラス34人～40人で学級が成り立っています。
◆ それぞれに得意なことがあるはず！



2

◆ 得意なことあれば、苦手なこともあるはず。



3

体験してみよう！

◆ 目を閉じて、自分の名前と住所を書いてみよう。
…どんな文字？

◆ 利き手と反対の手を使って、色紙で輪を作って、つないでみよう。



◆ 今度は、隣の友達と協力しあって、作ってみよう。

4

助けがあると…

◆ 思い通りにはいかないけど、一人で取り組むよりは、楽にできた。

◆ 時間が短縮された。

◆ 手伝ってくれた人に感謝した。

その他



5

目に見える苦手さ

◆ 最初の体験から
◆ 目の不自由な人は…

- ①黒めがねをかけている。
- ②白杖を使っている。
- ③盲導犬を連れている。

二番目の体験から
①肢体が不自由。



6

目に見えない苦手さ

◆ 耳が聞こえない、または耳がとおい。

◆ 声が出ない。

◆ 心臓が弱い。

◆ 学習に時間がかかる。

◆ 相手の気持ちを理解しにくい。

◆ その他



7

目に見えない苦手さを理解しよう

◆ 知らないうちに、相手を傷つけてしまっているかも…

◆ 「世界にひとつだけの花」は、なぜ大ヒットしたのでしょうか？

◆ 人間は、ロボットじゃない。個性があるから、楽しいんだ。



8

新しい仲間と共に！！

◆ 一人一人にそれぞれ得意なこと、苦手なことがあるのは当たり前！

◆ 同じ学級や、同じ場所で学校生活を送っていくのだから、楽しく過ごせるようにお互い協力し合って行こう！

◆ **みんな西原東中学校の仲間なんだ！！**



9



授業風景

【資料5】

道 徳 学 習 指 導 案

日 時 平成21年〇〇月〇〇日（木）〇校時
生 徒 西原東中学校 1年〇組
男子〇〇名 女子〇〇名 計〇〇名
指導者 西原東中学校 山川 米子

1. 主題名「個性について P a r t 1」

2. 資料名「個性って何だろう？」

～疑似体験による障害理解から～

3. 主題設定の理由

中学校区内の異なった小学校あるいは、校区外の小学校から入学した生徒で編成された学級の仲間達。それぞれに個性的であるが、その個性により生じる様々な出来事がある。

人は誰でも個性を持っている。その言葉から得手不得手について考えさせ、お互いが理解し合い、協力し合って生活しているかどうかを振り返る機会にするとともに、視覚障害や肢体不自由という疑似体験を通して、障害理解を図りたい。

また、特別支援教育学級担任という立場から、この授業を通して、本学級に在籍する生徒の理解を図ることも設定理由の一つである。

4. 本時のねらい

自他の違いに気づき、協力して学校生活を送ろうとする気持ちを高める。

5. 展開

	学習活動	主な発問と教師の支援	指導上の留意点
導 入	1. 「個性」について 思いのままに記入させる。 スライド1・プリント問1 (図7) (図6)	・相談したり、隣をのぞくことなく、各自思った通りに書くよう声かけをする。	・初めて授業に入る為、自己紹介を行い、本授業の設定理由を説明する等、雰囲気作りに配慮する。
	2. 資料の提示 「個性」の意味 3. 得意なこと スライド2 (図8) 4. 苦手なこと スライド3 (図9)	・辞書に記載されている「個性」の意味を確認する。 ・パワーポイントにより、いろいろな個性について確認する。 ・ “ ” 。	・パワーポイントを使うことにより、興味関心を持ってもらう。 ・学級の仲間の人数分個性があることを理解してもらう。

展 開	5. 得意なこと・苦手なことを記入させる。 プリント問 2・プリント問 3 (図 3) (図 6) 6. 視覚障害の疑似体験をさせる。 スライド 4 (図 10) 7. 肢体不自由の疑似体験をさせる。 スライド 5 (図 11) 8. 苦手ということから、目に見える障害について記入させる。 スライド 6・プリント問 4 (図 12) (図 6) 7. 目に見えない障害について記入させる。 スライド 7・プリント問 5 (図 13) (図 6) スライド 8 (図 14) スライド 9 (図 52)	・各自、それぞれの得意なことや苦手なことについて考えさせる。 ・プリントの裏に、目を閉じて、自分の名前と住所を記入してもらう。 ・色紙で輪っかを作る。その際利き手と反対の手で行う。 ・その人のこういった様子から障害者と気がつくのか考えさせる。 ・パワーポイントで確認する。 ・外観からは気づかない障害について考えさせる。 ・パワーポイントで確認する。	・学習やそれ以外のものも含めて考えてもらう。 ・完全に目を閉じるよう確認する。 ・書き終わった後に、目からの情報(視覚認知)がないと、文字の大きさや並び方等上手に書けないことを確認する。 ・輪っか作りようの色紙と糊等は事前に準備しておく。 ・一人で作るよりも二人で協力して作ることの大切さを強調する。 ・できるだけ生徒が答えてくれるよう待つ。 ・できるだけ多くの障害名を聞き出す。 ・ " " 。 ・大勢の中で同じスピードで学習できない仲間がいることも理解してもらう。 ・「障害」という言葉で仲間を中傷していないか、また、軽率に使ってはいけない言葉であることを確認する。 ・皆が同じ容姿で、同じ行動をしたら…。生徒たちから「気持ち悪い～」等という言葉が出てきたら Good!
まとめ	11. まとめ プリント問 6・7 (図 6)	・感想を記入させる。 ・他者への理解から、特別支援学級に在籍する生徒についても理解してもらい、協力し合って欲しいことに気づかせる。	・授業を受けての感想、要望等、自由に書いてもらう。

【資料6】

『個性について ～仲間と共に～』

年 組 番: 名前

1. あなたは「個性」って、どういうことだと思いますか？

.....
.....

2. あなたの「得意」なことは何ですか？

.....

3. あなたの「苦手」なことは何ですか？

.....

4. あなたの知っている、「目に見える障害」について記入して下さい。

.....

5. あなたの知っている、「目に見えない障害」について記入して下さい。

.....

6. あなたは今、学習面などで困っていることがありますか？

.....
.....

7. 今日の授業を受けて、感じたことを記入して下さい。

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

※今後もよろしくね！

【資料7】

第2学年道徳学習指導案

日時：平成〇〇年〇〇月〇〇日

対象生徒：△△中学校2年〇組

男子〇〇名 女子〇〇名 計〇〇名

授業者：△△〇〇〇え

1 主題名温かい人間愛内容項目：2－（2）

2 資料名「周りの理解」

3 主題設定の理由

(1) 価値観

指導項目2－（2）では「温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ」ことをねらいとしている。

中学生の時期には、人間愛に基づく他の人とのかかわりをもつことの大切さを理解できるようになってくる。人間愛の精神は、互いの存在を、強さも弱さももち合わせた生身の人間として、丸ごと肯定的に受け止めようとする思いが普遍化されたものである。

ここでは、歴史的にも有名な人物をとりあげながら、苦手とすることも周囲の人が理解し受けとめ肯定的に関わることで、良さの伸長につながることを理解し、互いに苦手なことも補い合いながら関わろうとする気持ちを育みたい。

(2) 生徒について

中学生は障害者ということばを知っているしまた自分達でも使うことがあるしかし「障害」と一言でいってもその種類や困り感は様々である。

「困っている」という状況は、障害があるなしに関わらず、日常生活の中では必ず誰もが体験することであり、また手助けしてもらえてうれしかったという経験もあると思われる。同じように障害を持った方への手助けをすることができればいいのだが、中学生にとって、関わることの少ない障害者に対しては、何かしてあげたいけれどもどう関わればよいのかかわからず行動できないことも多いはずである。そこで実際に関わることは難しくても知識として理解しておくことで行動に移せるチャンスになったり、自分の近くにも目には見えにくい困り感を持った仲間がいることを理解し、温かな言葉かけをしようとする心情を育てたい。

4 本時の展開

(1) 本時のねらい

障害者に対する理解や、見た目にはわかりづらい苦手さがあることを理解しようとする心を育てる。

(2) 授業の仮説

「発達障害」について学ぶことにより、見た目ではわかりづらい障害があることや苦手なことを周りの人が理解することで、障害はあっても素晴らしい才能を発揮することに気付くことができるであろう。

(3) 展 開

過 程	学習活動と主な発問	生徒の反応	留意点
導 入	(6人の人物カードを黒板に貼る) ○「この人たちの共通点は何だと思いますか？」 ・6人について、どんなことをした人たちかを簡単に確認する。	・歴史上の人 ・有名人	○全員が「障害があった」だろうと言われている人達であることを知らせる。
展 開	1 「障害」とはどんなものかを考える。 (資料1を掲示) ○「この4枚の絵の中で「障害」といえるのは、どれでしょうか？」 ○「障害があると言えるのは、どんな人のことだと思いますか」 2 外見ではわかりづらい障害について ・資料2(4人のこども)を提示 ○「黒板の4人には困っていることがあります。困っていることについてつぶやきがあるので、どの子かどのつぶやきを言っているのか考えてください。」 3. 発達障害について (第3学年指導案と同じ) ・脳の引き出しについて ・脳で起こっていることを助ける方法について<セロトニン>	・かぜや発熱は障害とはいわない ・耳が聞こえない ・目が見えないなど ・めがねをかけて杖をもっている子に関しては、迷わず困り感を当てることができる。 ・特徴のない2人に関しては、どの困り感を持っているのか悩む。	○治るものは、障害ではない。その状態によって、日常生活が不自由だったり、苦手な部分ができたときに「障害」ということをおさえる。 ○障害ではないけれど、障害が残る場合もあること付け加える。 ○日常生活の中で、どんな不自由なことがあるのか確認する。 ○障害を持っている人が何に困るのかがわかれば、こうすれば助かるかな。こんなものがあれば生活しやすいかな。と考えることができ、車いすや補聴器などの道具があることを伝える。 ○生徒があげた障害が、導入の人物たちにあてはまりそうか振り返る。 ○つぶやきの下に書かれている障名にふれ、なかには見た目ではわかりづらい障害があることを知らせる。また、これらは総称して「発達障害」と呼ばれていることを知らせる。
終 末	4. ワークシート記入		

本書は、財団法人みずほ教育福祉財団の
助成を受けて、刊行したものです。

特別支援教育研究論文 — 平成 21 年度 —

多様なニーズに応じた特別支援学級の弾力的な学級経営に関する実際的研究
— 通常の学級との連携を図った魅力ある授業づくりを通して —

平成 22 年 2 月 発 行

平成 22 年 3 月 印 刷

編集・発行 財団法人障害児教育財団

横須賀市野比 5 - 1 - 1

国立特別支援教育総合研究所内
